

干天慈雨

所属ゼミ…小説ゼミ2

学籍番号…52553015

氏名…末永 智也

■金井

チェックアウトの時刻があと十分と迫っていた。金井はベッド下の収納に白い結晶をつめたポリ袋をしまった。アイス、スピード、エス、呼び方色々あれど、どれも表立って売できない代物を意味している。素人目には塩と違いがわからないが、常用者なら判別は容易い。本物は水晶を砕いたように鋭利でいびつな粒になるのだ。金井が売りさばっているソレも鋭く、そして透いていた。

あと半日もすれば購入者が受け取りに来る。このペンションは床のホコリはもちろん、空調のフィルターや浴室の水垢まできれいに清掃している。だがベッド下の引き出しだけは、手つかずの状態だった。ここが安全な隠し場所だと気づいた金井は、幾度も受け渡しに利用していた。

金井は軽くなったスーツケースを手に階段を降りた。一階のロビーでは男性のオーナーが鼻歌交じりに籌を振っている。幸せそうな様子が金井の癪に障った。

「ご機嫌そうだね」

「ええ、それはもう」

オーナーは満面の笑みをこぼした。金井にはなにがそれほど楽しいのか全く理解できないが、客の立場からすれば心地よく映るのだろう。

金井の経験上、ああいうのんきな奴は一番損をする。ドラッグは人から人へ売り渡され、末端に行くほど値が上がっていく。あの男は、少しの量に高い金を払う人種だ。我ながらまったく良い商売だと思う。仕事に腰が入るといふものだ。

ペンションを出て駐車していたSUVに乗り込む。金のマールボロを一本啜えたとスマホを手を取った。電話で呼び出すと、相手は三コール目で着信に応じた。

「よう、やってるな」陽気な声が反響する。むこうはスピーカーカーで通話している。

「物はしまっておいた」金井はすうっと大きく一吸いする。

「あとは取りに来るだけ」

「どうも、いやはや毎度助かるよ」

相手の声音が妙に高い。期待で調子が乗っているのか、あるいは既にキマっているのか、と金井は肩をすくめた。

「楽しそうなところ悪いけど、大学生相手に流すのはもう少し考えてくれ」

金井がきっぱりと言う。

「ガキは仲間内で回してすぐ足がつく」

「わかっている。でも、あんたも事情はわかるだろう？ 興味とか懂れとか、くだらない理由でこっち側に入ってくる」

電話口の相手がけたけたと笑った。

「そういう問題じゃないぞ」

「はいはい。もし次があれば、口が硬いのを選ぶさ」

そこで会話が途切れる。金井は紫煙をくゆらせ、車窓の奥を一望した。赤く色づいた紅葉が富士山を後景にはためいている。

「ところで」通話相手が切り出す。「あんた、このあとの予定は？」

「ない。いつもどおり」

「味気ないな。ちょっとは観光でもしたらいいのに」

「おたくは楽しめばいいさ。今はちょうど紅葉が見頃のようだし」
金井はただ、と付け加える。

「このあたりは山から風が下りてきて冷える。夜に行くのはやめときな」

それに、と続けようとして金井は言葉に詰まった。相手も異変を察して、もしもし、と問いかける。金井は吸いかけのタバコをぐしゃぐしゃと潰し、ペンションの方を見た。

一階東側に位置する食堂からじつとこちらを伺う女性がいる。顔の輪郭はつかめないが、ほとぼる威圧的な雰囲気覚えがある。

「あれ、サツだな」

「なんで警察がここに」

電話越しの声に動揺が混じる。

マークされていたか、と金井は歯噛みした。一年ほど前から周囲を嗅ぎ回られていることは察知していた。まさかこのペンションまで捜査の手が伸びているとは。

「おい、金はもう払っているんだ。今更中止するのは勘弁してくれ」

「うるさい、黙っている」

女はいつも不幸を運んでくる。金井にとつてのそれは、前を横切る黒猫のように忌々しい因果だった。今度こそこの悪運を討ち滅ぼしてくれる。金井は意気込んで車を出た。

早歩きでペンションに戻る。金井の瞳には強い意志が宿っていた。

「もしものときのプランBでいく。チェックインは予定通りに」

「あんたはどうする」不安げな声が金井に問うた。

「ちょっと用を足してくる」

「あと最後に」

「なんだ、もう切るぞ」

「さっき、『それに』って言いかけたろ。なんて言いたかったんだ」

金井は、はあ、と嘆息する。こいつ、実はふざけているのか。

「おい、なんて言いたかったんだ」

「天気予報は要チェックってことだ」

ブチッと通話終了のマークをタップした。

■清水

「自殺志願者、じゃあないよね」

目を細める警察官に訊かれ、清水慶次郎はすつとんきような声を漏らした。傾いた太陽がちょうど前方の山陰に沈んだ。車のメーター脇の時計は十八時と表示している。日没もずいぶん早くなった。

富士山麓のペンションを予約した清水は、法定速度きっかりで走行していた。森を縦断するトンネルは見通しが利き、ドライバーを速度超過させるきらいがある。だからパトカーが目を光らせていたわけだが、そこへちんたら走る清水のセダンが通りかかった。

パワーウィンドウから車内を覗いて、警察官は眉をひそめた。清水は旅行者だというのに荷物を載せていなかった。スーツケースはおろか、明日の替えのパンツさえ持っていない。曰く、みんな人にかけてしまった、と弁明するのだから奇妙に思われても仕方ない。

「たまにいるんだよ。こういうところに停めてふらつと森の中に消えていく輩が」

「そうなんですか。大変ですね」

なにが大変なのかまったく想像せず、清水は相槌を打った。残り少ないガソリンを気にして、燃費の良い走りを心がけていた。まさか安全運転を理由に免許を見せるはめになろうとは。

「俺は自殺なんてしませんよ」

「そう言われても、こっちは判断つきかねるのよ」

警官は、ほらこれ、とA6判のチラシを手渡した。「山梨県警自殺相談ダイヤル」と柔らかなフォントで書かれている。いらぬいなあ、と顔をしかめると「捨てたら軽犯罪法でしょっぴくから覚悟してね」と釘を刺される。

「まあ、これだけ喋れるなら自殺の心配はないけど、気をつけてね」

「おまわりさんこそ」

チラシをジャケットのポケットにしまい、ゆるやかに車を発進させる。警官が視界の外へ外れると、ふつと清水の笑顔は消え失せた。まるでスイッチを切ったように、表情のない人形へ変わった。

清水は淡々と高鳴る鼓動を感じた。あの警察官は鋭い勘をもっている。彼の読み通り、清水はたしかに自殺を目的に樹海付近までやってきた。ペンションに泊まれば金が尽きる。その後は森に入ってひっそりと首を吊ればいい。片道切符の旅に荷物は不要だろうと。

気を紛らせようとカーステレオに手を伸ばす。ラジオは抑揚のある男性声を発した。

「連日の晴れ模様から一転、十月の三連休はどんよとした空模様。中部は夜八時から雨雲が重なり、荒れた天気になりそうです」

二十分もしないうちに件のペンション「ふぉへん」が見えてきた。なだらかな三角屋根が特徴的で、食堂のある建物東側が張り出している。窓越しに灯る暖色の明かりが和やかな印象を与えた。

人生最後の夜を迎える宿としてはいささか質素ではあるが、清水はむしろこれを求めている。彼にとっては、画一的なホテルサービスより、落ち着いた宿で過ごすなんてことない時間にこそ価値がある。

車を降りると冷たい風が額をなでる。湿気た空気が建物の後方、山の方角から吹き下りて

くる。山頂には雪が降っているのではと思われた。

ちりんとペンションに入る。暖房がよく効いていて、アウターを着ていると暑苦しい。清水はジャケットを小脇に抱え、カウンターの卓上ベルを鳴らした。音を聞きつけて、若いスタッフが応対した。濃茶のエプロンを肩から垂らし、胸元には「寺尾」と書かれたバッジが留められている。

「ようこそいらっしゃいました、ご予約は」

「します。一名で清水です」

清水は、てきばきと動く寺尾の様子をぼうっと眺めながら、首をつる紐をもっていないことに気づいた。シャツの袖を破いて結べば代用できるだろうか。結び方を後で調べておかないと。くは。

「あの」

「はい？」

「ですから、こちらにご記入をお願いします」

清水の意識がふっと引き戻される。彼は無表情で謝り、ペンを手に取った。

「お部屋は二階になります」

チェックインを済ませ、鍵を受け取る。木製のキーホルダーには「宇治山」と書かれている。ペンションなのに和風のネーミングとはどういう見だろう。清水は首を傾げた。

階段は蹴上が低いわりに奥行きのあるつくりで、うっかり転んでしまいそうになる。二度右に折れ曲がって二階へ上がると、正面に扉が現れる。そこから右方向へ客室がずらっと並んでいた。客室扉にはプレートがかかっている、「鏡山」や「花色」とまたしても雅な名がつけられている。

そのとき、「花山」の扉が開いて、女が顔をひよっこりのぞかせた。

「すいません、ドライヤー貸してもらえませんか？」

彼女は濡れた髪をとかしながら漫然と訊いた。風呂上がりらしく、化粧はしていない。薄い眉に小さくひかえめな唇は、能面の小面を彷彿とさせる。

「えっと、部屋にあれば貸せますけど」

「はい？　なんで把握していないんです？」

清水は膝を打った。どうやら彼女は、清水をスタッフだと誤認しているようだった。すぐ訂正すると、彼女は申し訳なさそうにぺこぺこお辞儀した。

「ごめんなさい、わたしでっきり」

「そんなに謝らなくても」

苦笑すると、はっと彼女の目が合う。彼女は突然目を剥いて慄いた。

「あ、あの」

「なんでしょう」

「わたしたち、以前会ったことありませんか？」

いきなりなにを言い出すんだ、と清水は気味悪がって一歩退いた。彼女は、清水が距離を取ったと認めると絶望したかのように青ざめた。

「たぶん、はじめましてだと思うんですが」清水は顔を背けて応じる。

「そう、ですか」

ちらと顔色を伺うと、今度は底抜けに嬉しそうにしている。一体何なのだ、この女は。

清水は内心、不快感を催していた。女に絡まれるとろくなことにならない。彼の三十五年の人生で学んだ教訓だ。

むかしタクシーの運転手をしていた頃、飲み会帰りの酔った女を乗せたことがある。かなり出来上がっていて、口頭でのやりとりもままならないほどだった。「私の家だつて言ってるんだろ、そんなこともわからねえのかボケが」と散々罵倒を浴びせられ、しまいには肩を殴られた。美しいバラには棘がある、とよく使われる言い回しがあるけれど、女性のそれは豹変に等しく、予測できないことが棘より厄介だと清水は考えた。あときは我慢できずにやり返したが、非があるのは間違いなく女の方だ。

「じゃあこれで」清水は踵を返す。

「あ、待ってください。私、秋山翠華ついでいます」彼女は扉を閉め、並走するように清水の横を歩く。

「なんだか、着いてきているぞ。「清水慶次郎です」と無表情で返した。

「清水さん。たしかに清水って感じありますね」

秋山は味わうように苗字を反芻し、彼の頭から足先まで視線を巡らせた。

清水は返答に困って押し黙る。彼が秋山と聞いて想像するのは、太ましいコント芸人だ。ここは相手に做って「秋山ぼくくないですね」とでも返事するべきか、と思案する。

そのとき、清水は宇治山の札を見つけて足を止めた。部屋に入ろうとすれば、とりあえず会話を切り上げられる。

「僕はここなので」

「この夕食は七時からなんですよ。一緒に行きませんか」

秋山は聞こえなかったのか、聞こえていてスルーしたのか、会話を無理やり続ける。

扉を開けようと鍵を差し込んだとき、とんとんと階段を登る音が聞こえてきた。清水の来た方向からではない。音は廊下の奥、薄暗い階段からする。清水は思わずそちらを向いた。

上がってきたのは、金髪を短く切りそろえた女性だった。アイラインは濃いツリ目がちで、耳の軟骨にインダストリアルピアスを刺している。いかにも遊び慣れた風貌だ。

また女だ。金髪の女性がこちらを目に留めて口を開きかける。清水はとっさに身構えた。「廊下で騒がないでもらえますか」

女はびしゃっと秋山を咎めた。彼女が冷水を浴びせられた隙に、清水は逃げるように部屋へ滑り込んだ。カチツと錠を下ろす。

ふうと吐息し、ベッドに横になる。やわらかく沈むマットレスが、彼の体から疲れを吸い出した。

清水はすぐ金髪の彼女のことを考えた。真意はどうあれ、結果的に彼女の介入で秋山の執拗な接触を逃れることができた。女だからと気構えたことが、なんともバツが悪かった。となりの部屋で扉の開閉音がする。金髪の彼女だろうか、と清水は眠気眼で思った。

◇

清水はセダンの運転席にいた。

なぜここにいるのだろうか。清水はペンションに泊まっていたことを思い出し、自分が夢を見ていることに気づいた。

これは夢だ、大丈夫。だから早く起きるんだ。念じても眠りの世界から抜け出せない。思考に反して体は勝手に動いた。

ルームミラー越しに後部座席を見る。目元を泣き腫らした女性が鼻をすすっていた。口元には殴られた痣がある。

「アリスさん、痛みますか」

清水の方から話しかけた。働く姫たちは基本的にドライバーと会話しないよう教えられている。運転を邪魔しないという大義名分だが、その実、スタッフと嬢が関係を持たないための予防線だ。

清水は自らその禁を破っていた。

「大丈夫」

アリスは痛むことを否定しなかった。

夜の街明かりが次から次へと後方へ消えていく。車内は会話も音楽もない沈黙である。

この夜、アリスは客に歯を立てて何度目かの懲罰を受けた。口元の痣は、この無店舗性風俗を取り仕切る金井崇史に折檻された証拠である。

「俺が言うのもおこがましいですが、悪いのは客の方です。気にしないでください」

でまかせだった。清水はなにも考えていなかった。水商売の世界では嬢のヒエラルキーが高い。彼のように雑務を担う下端は、アリスたちを立てることに努めなければならないのだ。

「ありがとう、しみけー。私、もう気にしてないから」

しみけーというのは清水慶次郎を縮めた愛称だ。デリヘル嬢たちと同様に清水にも名前を与えよう、と考案された。清水にとっては囚人番号にも等しい。

「でも嬉しかった」

「え、痛くされるのが好きなんですか」

「あははっ。違うって、そんなわけないじゃん」

「じゃあどうして」

清水は前方を向いたままアリスに訊いた。

「『なにも殴ることはない』って私をかばってくれたでしょう。それで崇史さんがもつと怒ってしみけーまで殴られてさ」

清水は手で鼻を拭いた。固まりかけでペースト状の血が指先にこびりついた。痛まないから全く気付かなかった。

「――顔は、だめですよ。お客さんを取れなくなる」

「そう。うん、わかってた」

アリスは寂然と窓の外に視線を移した。

待機所のあるマンションの前に停車する。部屋はパーテーションで区切って個人のスペースを確保しているが、嬢からは「狭いうえに熱い」ともっぱらの不満だ。そのせいか夏場は「車のなかで待機させてほしい」と言われる始末だった。

清水はアリスを引き留めようとしたがかける言葉が見つからず、とぼとぼ階上に消える彼女の背中を見送った。

こんこんと車体を叩かれる。長い茶髪の女性が指で「乗せて」と訴える。清水はすぐにウインドウを下した。

「お疲れ様です、アイルさん」

清水はうやうやしく頭を下げた。アイルは嬢のなかでも特に古株で、金井崇史が目をかけている。清水はこれ以上なく慇懃に対応した。

「しみけー、崇史のところまでお願い」

「わかりました」

清水は後部座席のドアロックを外す。アイルは彼の予想に反してぐるっと助手席に回った。

「ここ、失礼するね」

「どうぞ」

セダンは転回して来た道に戻っていく。

「しみけーはさ、なんで崇史の下で働いているの」

沈黙を破ったのはアイルだった。

「いきなりですね」

「借金が理由じゃないんだろ」

清水は黙殺した。金井の女だとはいえ清水が望んで口にした話題ではなかった。

前方の信号が黄色に変わる。

清水はアクセルを踏んだまま突っ切ろうとした。

「あんたやったね。ひとを」

ギョツとブレーキを踏む。タイヤが甲高い悲鳴を上げる。

信号は赤く点灯していた。

清水は乱れる心拍を整えるために深く呼吸した。

「言わないでいいよ。そういうことは信頼できる相手に自分から告白するものだから」

アイルは物憂げに足を組んだ。

彼女の口ぶりは金井と共通するものを清水に感じさせた。

「アイルさんは崇史さんと似ていますね」

「好きな相手には段々似るものだよ。私はしみけーも崇史に似ていると思うけど」

「まさか。冗談じゃありません」

「ふふ。崇史が聞いたらあんた半殺しだよ。さらにもう半分を私が握っているってこと、忘れないでね」

それはまぎれもなく脅迫だった。

セダンはハザードを焚き、ガードレールから少し離れて停車した。

「着きましたよ」

「そう。エンジン切って」

アイルに促されるままに清水はキーを抜いた。メーターも消灯して車内は完全な闇に包まれる。

「アリスちゃんを庇ったんだって。まったく命知らずだね」

彼女の口調は清水を労いつつも、金井の残虐さを誇っているようでもあった。

「アリスさんはこういう商売に向いてないですから。間違ったことはしちやいけないうって

律する気持ちが強くて」

「たしかに向いてないね。店の先輩のところに挨拶に来ないし、失礼この上ないよ」

清水はアイルを一顧だにせずペットボトルの水を流し込む。

アイルは清水の腕を引き、豊かな双丘の間に挟んだ。触れ合っている部分だけ、感覚が研ぎ澄まされたようだった。清水は身を引いて当惑する。

「やめてください」

「やっぱり、あんたは崇史に似ているよ」

アイルが腕を回して清水に抱きつく。胸に伝わる柔らかな感触が、鼓動はますます加速させる。

「女を遣う仕事をしながら同時に女を恐れている。それ以上に不器用な愛も抱いている」

「おっしゃる意味がわかりません」

「しみけーは母性も知らないでしょう。そこも崇史と一緒」

清水は総毛立っ思いだった。彼はたしかに父子家庭で育ったが、それをアイルに教えたはずがない。観察だけでそこまで見抜くのはおぞましかった。

「知ってる？ あたしらがなにしているか」

彼女は左耳に接吻しそうなほど顔を近づけ、ゆっくりと囁いた。こそばゆい感触が脳を蝕んでいく。

やめてくれ。それ以上思い出させないでくれ。

清水は今すぐにでも目の前の妖魔を振り払いたくなった。

「――客と行為をして、ついでにシャブの受け渡しでしょう」

アイルがにんまりと微笑みかける。

「やっぱり知ってるんだ。しみけーも共犯だね」

共犯という単語にぞくりと悪寒が走る。清水とてこんな仕事は御免だ。

意を決し、アイルの肩を掴んで剥がそうとする。

しかし、体は恐怖で動かない。

彼女の手が清水の脇から腰へと滑り、ベルトの金具に触れた。指先が直下のチャックに伸びかけると、清水は限界に達した。声にならない雄叫びを上げ、無我夢中にもがいた。

そこでふっと目が覚めた。息を乱しながら、清水は天に祈った。その先の出来事まで再現されなくて本当に良かったと。

テーブルのデジタル時計を見やる。時刻は七時を半刻も過ぎていた。一時間も眠っていたのかと思う反面、こんなに長く感じた一時間も初めてだった。

部屋を出ると二階は静まり返っていた。宿泊客たちは皆食堂に行っているのだろう。

清水はふと金髪の女性を思い出す。扉にかかる札を確認してみると、「宇治山」の隣室は「山風」だ。清水は彼女に一言礼を言いたい心持だった。

◇

清水は一階の食堂へ向かった。部屋に留まると、またまどろんで悪夢を見てしまいそうな気がするのだ。特に空腹感はなかった。胃袋ははじめから体内に存在しなかったように、う

んともすんとも言わなかった。

施錠しようかとも思ったが、どうせ盗られるようなものも持っていないし、食べて帰って来るだけだから、とシャツ一枚で部屋を後にした。

食堂は、漆喰の壁を温白色に照らす広々とした空間だった。ほかの宿泊客たちはワインを片手に談笑している。

当然、秋山も夕食に舌鼓を打っていた。清水の到着に気づくと、こっちだよ、と手招きする。清水はさも申し訳なきそうにかぶりを振った。

丸テーブルの上に室名を書いた紙が立ててある。清水は「宇治山」のテーブルを見つけて、腰を落ち着けた。

清水は室内を見回した。部屋の隅には、暖炉と座敷が設けられている。冬になれば炉の熱に当たれて最高の席になるだろう。その冬の到来を待たずにこの世を去ることが口惜しく感じられた。

「いらっしやいませ、お待ちしていました」

男性のオーナーがやってきてグラスに水を注いだ。人の良さそうな顔で、垂れた目尻がシワと繋がってなんとも愛嬌がある。

「いい雰囲気でしょう、ここは」オーナーは誇らしげに言った。

「この物件を見つけたときに気に入って、リノベーションもこの食堂だけは残したんですよ。古そうに見えて、本当に古いです」

「へえ、そうなんですか」

世話ばなしも早々に、オードブルをお持ちします、とオーナーはキッチンへ行ってしまった。

「はあ、まだ肉こないのかよ」

隣のテーブルでがやがやと話しているのは、男子大学生のグループだ。三人で食卓を囲み、ひもじそうにフォークにかじりついている。

ほかのテーブルにも視線を向けると、空いた皿が下げられずにそのまま。そんなに忙しいのだろうか、と清水は首を傾げる。

「今が七時五十分だから、もう三十分経つぜ。ふつうお客さん帰っちゃうよ。俺帰るよ、まじで」

小柄な青年が文句をたれた。きれいに巻いたパーマに濃茶のフライトジャケットで決めている。これからアートでもするかのような気合の入れ具合は、アットホームなペンションと釣り合わない。

「そりゃあ、お前の働いてるファミレスならな。」「KOをわきまえろって」

中背の学生がたしめる。レスラーと見紛う立派な体格で、服の上からでも筋肉が山脈を形成していた。相反するように幼い顔立ちは、アンバランスな印象を与える。

「いや、お前ら馬鹿すぎ。それ、正しくは「PO」だから」

頭一つ高い青年がすばやく修正した。瘦身で伸ばした直毛から面長の顔をのぞかせている。ギターを持たせればポップシンガーに見えなくもない、と清水は思った。

食べ盛りの若者に三十分は耐え難いだろう。横目で伺っていると、細身の学生が清水の視線に気付いた。

「おじさんもきっと待ちますよ」

学生はにこりとほほえむ。仲間内の粗暴な言葉遣いとは打って変わり、柔らかな物腰だ。残るふたりも清水の方を向く。

「――どうも」

清水はこくりと首を振った。

「でも料理はめっちゃくちゃ美味しいですから」

「そうそう」

学生らはこちらを気遣ってか、口々に料理を称賛する。一押しはミルクコンソメスープで、トッピングされた焦がしチーズと一緒にすするのが絶品なのだとか。

そのまま自然な流れで自己紹介が始まった。

文句を言っていたパーマが小林誠人。

筋骨隆々な男が園田圭斗。

ミュージシャンっぽい優男が山路廣木だ。

全員、同じ大学の一年生なのだという。

おや、と清水は彼らのグラスにワインが注がれていることに気づいた。一年生ということ、浪人していなければ年齢は十八か十九だ。立派な未成年飲酒である。

「俺らそういうの気にしないんで」

山路はあつけらかんと告げた。彼の家族は父母共々酒好きで、しっかりとその遺伝子を継いだらしい。飲み会の企画はいつも彼が主導するそう。清水は、山路と同じ名前の日本酒が存在することを思い出す。もしかしたら、彼はそこから名付けられたのかもしれない。

「気にしないわけじゃないんだけど」園田は前腕の筋肉を揉んだ。

「出た。お前、毎度その話するよな」小林がけたけたと笑って手を叩いた。

「は？ これは本当に大事なことから。」

アルコールを入れると筋肉が分解されてしぼんじゃうんだよ。しかも一緒に摂取した糖分が脂肪になって蓄積するから、できるだけ飯は制限しないとイケないんだ」

小林は饒舌に語る。清水は小さく挙手をして訊いた。

「じゃあ夕食も制限したんだ」

「いや、今日はチートデイなんで」

どっと空気が弾けた。大学生たちは腹を抱えて笑う。清水は口角が吊り上がりすぎて表情筋が痛むほどだった。

こうやって笑うのはいつぶりだろう。若者からは特有のエネルギーが拡散されていて、それが清水を内側から温めてくれたような感じがした。

そのとき、キッチンに入るドア脇の子機が鳴りはじめた。オーナーが小走りやってきて電話を取る。

「ペンション『ふおへん』です。ああ、石田さんですね」

清水は大学生三人と話しながら、なんの気なしにその様子を眺めた。オーナーの言葉遣いから、どうやらかけてきた相手は宿泊客のようだ。

「夕食は八時半がラストオーダーとなっております。そちらからですと四十分ほどかかりますね……はい、お待ちしております」

「お客さんかい？」

キッチンから壮年の女性の声が響く。姿は見えないがオーナーの奥さんだろう、と清水は

見受けた。

「ああ、なんとか間に合いそうだって。それより」

「塩貝さんね。まったくどこ行っちゃったのかしら」

おかげで手が足りない、と厨房からため息がこぼれた。

◇

「ふおへん」が提供する料理は、どれも趣向が凝らされていた。評判を聞いていたスープも実に美味しかった。けれど、半分を口にしたあたりで、清水の手は止まってしまった。胃がもたれたわけでもないのに、それ以上食べる気が起きなかつたのである。

食器が下げられた頃には、大学生のグループも去っていた。静かになったな、と清水は背もたれに身を委ねる。

「どうでしたか、お食事は」

顔を上げると、ワイングラスを片手に秋山が立っていた。着席の可否を聞かず、彼女は清水に向かい合って座った。

「席は決められているんですよね」

清水は婉曲に秋山を咎めた。

「大丈夫ですよ」

ほら、と秋山はよそに目をやった。「唐紅」と書かれたテーブルに男女が着いている。ふたりの手は、互いを感じ合うように重なっている。彼らは見たところ二十代から三十代だが、付き合いたての高校生のように熱々とした空気を醸し出していた。

「男性の方は、元々あつちの『天津風』のお客さんです。オーナーさんも特になにも言っていないし、オツケーってことでしょうか？」

秋山をふふんと笑った。

カップルは立ち上がり、唇を重ねて食堂を後にする。清水は見ているのも恥ずかしくなつた。彼らの背後に、恋を成就させる伝説の桜の木がそびえているように空目した。

「清水さんいかがです」彼女はグラスを傾ける。

「今は、もう飲みません」

「もう、というと飲んでいたけど辞めたんですね」

そこで清水は余計なことを口走ったことに気づいた。疲れていると、自分の口にも戸は立てられないらしい。彼は訥々と、慎重に話した。

「お酒は人の本性を暴くというでしょう。俺は、飲酒が原因で迷惑をかける人には絶対になりたくないんです」

「へえ、まわりを気遣っているんですね。格好いい」格好いいという単語が、ちくりと清水の胸に刺さる。その言葉を聞くだけで、嫌が応でもあの悪魔のような女が頭に浮かんでくる。秋山の話術はアイルの面影すら感じさせる。アイルの化粧を剥けば、下から秋山が現れるかのように思えた。

「俺は格好よくなんて」

「ごめんなさい、嫌でしたか」

「別に嫌というわけではないですが」

清水は腕を組んで服をぎゅっと握った。彼はほぼ無意識にその仕草をやっていた。

それからしばらく沈黙が続いた。食事が途方もなく昔のことのように感じられ、どうして彼女がテーブルについているのかさえ一瞬忘れてしまうほどだった。

「――清水さん、ちょっと変です」

えっ、と清水は顔を上げた。秋山は真剣な眼差しで続ける。

「ほかのお客さんはみんな楽しそうなのに。当たり前ですよね、旅行ですもん。でも清水さんはフラフラしていて、すぐにでも消えてしまいたいそう」

「歩き方に問題が？」清水はおどけて返す。

「そうじゃありません。料理、ほとんど残していましたよね」

見られていたのか。清水はぬるくなったお茶を煽った。

「もし辛いことがあるなら、私、相談に――」

「大丈夫ですって。少し、ひとりにしてもらえませんか」

清水は冷たく突き放す。秋山は啞然として顔を強張らせた。

時が止まったように、しんと静寂が降りる。

ふたりの重苦しい空気を振り払うように、慌ただしい足音が聞こえてきた。

「いやあ降られた降られた。申し訳ないね、仕事が押してしまっ」

男がオーナーと並んで食堂に入ってきた。ずぶ濡れのレインコートを脇に抱え、ころころと膝くらいの高さのキャリーケースを引いている。

ふと窓に視線を向けると、雨が激しくガラスを叩いていた。ラジオの予報通りだ。

「さっそくで悪いけど、ディナーを頼むよ」

彼は悪びれる様子もなく、さっぱりとした笑顔で言う。口ひげと丸メガネが伊達男を演出していた。

「はい。石田さん、お席はこちらです」

オーナーの誘導で、石田は「山風」のテーブルについた。石田はだいぶお腹が減っているのか、水を飲んだり、カトラリーをいじったりと、落ち着きがなかった。

「とにかく」秋山は席を立った。

「清水さんが心配です。私がだめなら病院に行ってください。絶対ですよ」

秋山は早足で食堂をあとにした。清水は彼女の背中にかける言葉が思いつかなかった。

清水は両手でおでこを押さえ、深く息を吐いた。

テーブルにはスマホが置かれたままになっていた。手に取ると、ピンクのカバーにウサギのキャラクターが印刷されている。もちろん清水のものではない。

秋山が忘れていったのか、と清水はスマホをズボンのポケットにしまった。部屋に戻るついでに返しておこう。

そう考えたはいいものの、清水には億劫だった。ひとりきりにしてくれと言ってしまった次第、彼女に顔を合わせることは躊躇われた。

さてよ。彼女はわざとスマホを置いていったのではあるまいか。忘れ物を清水に届けさせることで、再び話ができるそう踏んで。

いや、それは考えすぎだろう。清水はひとり苦笑した。初めて会った秋山にそんな策を弄する理由がない。異常だという秋山の指摘もあながち間違っではないなかった。

「やっぱおかしくなっているんだな、俺は」

清水はぼそつと呟いた。自ら命を絶とうとするやつが正常なはずがない。合理的な手段だと捉えていた自分が馬鹿らしく、清水の気持ちはずうつと沈澱した。別のテーブルでは、石田が美味そうに料理にありついている。これが普通なのだろうか、と清水はじっと観察した。

カットされたミニトマトにフォークを突き刺す。赤い汁が吹き出し、重力に逆らいながらフォークを伝って駆け上がる。ゆっくりと持ち上がり、石田の舌が出迎えた。口内でトマトが暴れるかのように、石田の頬が膨縮を繰り返す。

「なあ、お兄ちゃん」

石田に声をかけられ、清水ははっとした。

「そんなに見られちゃ食べづらいよ」

優しい声音だった。清水は逃げるように食堂をあとにした。

◇

二階はしんと静まり返っていた。耳をすませば、降りしきる雨と風の吹き抜ける音が聞こえる。時折、がたと窓が揺れる。その音にだれも反応しないからか、清水はこのペンションにひとり残されたような感覚に陥る。

清水は秋山のスマホをズボン越しに撫でた。彼女の部屋はたしか「花色」だったな、と扉に目をやる。やはり部屋をたずねるのはためらわれ、そのまま通り過ぎた。

「あれ」

「宇治山」の札がかかる内開きの扉が少しだけ開いている。近づいて足元を見ると、棒状のものが挟まって閉じるのを邪魔していた。

すき間から部屋の暗がりのぞいている。

「誰だよ、こんなことしたの」

苛立たしくなって言った。ひよいと拾い上げ、挟まっていたものを廊下の光に晒した。

挟まっていたのは、ナイフだった。刃はイカスミのように真っ黒に染まって固まっている。指先でなぞると、ひんやりとしていて滑らかな心地だった。

どうしてこんなものが、ここに？ 奇妙に思った清水は、照明のスイッチを入れて部屋に入った。

異変があることは一目でわかった。ベッドの傍ら、たらいをひっくり返したように赤黒い液体が溜まっている。液体は滴りながら移動し、奥のクローゼットに続いていた。

なんだこれは。心臓がどくんどくと次第に高鳴っていく。息苦しくなり、清水は犬のように口で呼吸し始めた。

一步、また一步とクローゼットに近づく。恐怖と混乱が脳をかき混ぜる中、危険な好奇心が清水の体を操っていた。手をかけるとスライドは音もなく開いた。

金髪の女が中で横たわっている。目が合ったと思われたけれど、すぐに焦点があつていないことに気づく。彼女は液体を胸からたっぷりと浴び、服が肌に張り付いていた。

からん、とナイフが手から滑り落ちる。清水はすぐさまクローゼットを閉めて退いた。がちゃんとスライドのぶつかる音が鳴り響く。

彼は今しがた、自分が目撃したものを理解した。

女は死んでいた。血を流し尽くして呆然と暗黒の中で息絶えていた。

「どうして、どうしてこんな」

恐ろしくなり、清水は脱兎のごとく駆けて廊下に飛び出た。

彼は目を閉じて祈る。これは夢の続きだ、俺はまだ眠っているんだ。だから早く覚めてくれ。現実だとわかっていても、そう思うことでしか自分を落ち着かせられなかった。

「どうしたんですか」

振り向くと、石田がキャリーバッグを抱えて立っていた。

「いや、あの」清水はドアを隠すように言う。

「大丈夫ですか。何かあったんでしょう」石田は心配そうにするが、その眼差しには疑いの色を帯びている。首を伸ばして部屋を覗くような仕草をする。

石田がドアに手を伸ばそうとして、清水はとっさにその手を払い除けた。

「痛っ」

石田は後退りしてキッとにらみつける。

「なにするんだ」

石田が声を張り上げる。彼の声はペンション中に響き渡った。それは威嚇というより、まわりに危険を知らせるためのシグナルのようだ。清水はポリネシア系のスポーツ選手が試合を前にあげる雄叫びを想起した。

騒ぎを耳にし、他の宿泊客が部屋から顔を出した。奇異の視線がふたりに注がれる。

清水の思考は、血塗られたナイフを見たとき以上に、急速に冷静さを失っていった。ナイフを拾い上げたのも自分、死体を見つけたのも自分、そして今、部屋の前で宿泊客と揉めているのも自分だ。この状況証拠の連鎖は、あまりにも完成されすぎている。すべてが清水を殺人犯として仕立て上げようとしていた。

「俺は何もやってない。俺は被害者だ」

そう叫びたいのに言葉は出なかった。乱れた呼吸が発声を阻害し、声を出す暇を与えてくれない。彼の体は、周囲の視線という名の重力に押しつぶされていく。

「どうかしましたか」

スタッフの寺尾がやってきた。明らかに動転した清水を落ち着かせようと近づいてくる。

「ちょっとまって、入らないでください」

清水は彼らに待ったをかける。その声は懇願になってしまった。もはや異常を隠そうとする犯人にしか聞こえないだろう。かえって寺尾は訝しんだ。清水の呼びかけは、中で異常が起こつたと伝えるに等しかった。

突然うしろからがしつと掴まれる。太い腕が回されて羽交い締め の 体勢になる。

「うっし、捕まえた」

園田が清水を抱えて言った。圧倒的な筋力に清水はなすすべもなく、手足をばたつかせることしかできない。

「おいおじさん。落ち着けて」

小林がどうどうと胸を叩く。その穏やかな声が、かえって清水の焦燥を増幅させた。

「スタッフさん、俺らで押さえとくんぞ」

山路は清水の足を両脇に抱える。これで完全に動きを封じられた。寺尾は安心したと見て部屋に入る。血溜まりに声を荒らげ、そしてクローゼットを開けた。

「うわあ」驚いて飛び退き、目を丸くしてもう一度死体を見た。彼はへたり込み、わなわなと震える。そして清水に向き直ると

「警察、警察呼んで。そいつが犯人だ！」

寺尾はへたり込んだまま、震える指先を清水へと突きつけた。死体を目の当たりにした衝撃で、その表情からは理性の色が完全に抜け落ちていた。

「塩貝さんを……塩貝さんを殺した」

悲鳴のような告発だった。その狂気じみた響きに、取り押さえていた学生たちも度肝を抜かれた。

「殺人」

園田が驚愕に目を見開き、一瞬だけ、拘束していた腕の力が緩む。

今だ。思考よりも早く、生存本能が清水の身体を弾けさせた。彼は全身のバネを使い、まわりつく三人を強引に振り払う。

「うわっ」学生たちがよろめくすきを突き、清水は階段へ向かって疾駆した。

「逃げたぞ！ 捕まえろ！」

背後で怒号が炸裂する。だが、振り返れば終わりだ。全身の血が沸騰し、心臓が早鐘を打つ。

「――清水さん」

不意に名前を呼ばれ、清水の足が凍りついた。階段のそばに、秋山が立ち尽くしている。彼女はまだ何も知らない。なぜ清水が血相を変えて走っているのか、理解できずに瞳を揺らしている。

ズボンのポケット越しに、彼女のスマホの硬い感触が伝わった。返さなければ。誤解を解かなければ。だが、背後からは追っ手の足音が迫っている。今の清水は、殺人犯として追われているのだ。

「くそっ……」

清水は彼女から顔を背け、無言のまま階段を転げ落ちるように駆け下りた。

無人のロビーを風のように抜け、玄関のドアを蹴破るようにして外へ飛び出す。

途端、突き刺さるような雨風が全身を震え上がらせた。ジャケットは部屋に置きっぱなしだ。シャツ一枚の肌を容赦なく襲う寒さは、今の自分が置かれた孤独な立場を痛烈に思い知らせる。

「ちくしょう、ちくしょう！」

震える手でドアノブを引くと、清水は自分の車に滑り込んだ。

追っ手が玄関から飛び出してくるのがバックミラーに映る。清水は祈るようにキーを捻った。キュルル、とセルが回り、エンジンが咆哮を上げる。メーターパネルが淡く発光した。

それが、唯一残された希望の灯火のように見えた。

■ 佐川

夜更けとともに雨脚は強まっていた。県警本部から三十分とかからないはずが、事故による交通規制で遠回りを強いられている。肝要な道路が使えないだけで、こんなに不便になるとは考えもしなかった。

「良い警官と悪い警官って知っているよな？」

現場へ急ぐ車の中で、佐川篤弘は当然とばかりに質問した。カコンカコンとワイパーが小気味よく雨雫を散らす。

「ええ、もちろん。例えるならナツパとベジータですよね」

登藤という後輩の刑事が助手席で応える。漫画のキャラクターに例えられても、佐川には的を得ているのかわからない。

「うおおん」佐川が咳を払う。「今回は基本的に忠実で行こうと思う。俺が良い警官で――」

「ええ？ 僕が良い警官じゃないですか、普通」登藤は驚愕して言う。

「お前に任せられるわけないだろ。感性がとことんズレてるお前に」

ブツとドリンクホルダーに置いていたスマホに着信が入る。

「先輩、電話に出ないんですか」

「出られるか。切符きられるわ。誰からだ？」

登藤は画面に映っている番号を読み上げた。佐川はああ、と声を漏らす。

「それ、弟だ。今は教師をやっているな。たまに愚痴を言いに来る」

ウィンカーを出し、ペンションの敷地に入り入れる。警察車両がすでにいくつも停まっている。佐川は登藤を急かして建物に入った。発見したふたりはすぐに駆け寄る。

「お疲れ様です、おかつさん」

登藤が元氣よく先輩刑事である岡田を呼んだ。運動部だった名残なのか、「だ」が極端に省略されてお母さんに聞こえなくもない。ちなみにこの呼び方は岡田からものすごく不評なのだ。

「誰がお母さんじゃぼけ。現場は二階だ」

彼はふたりをつれ、「宇治山」の札のかかる部屋に案内した。室内は血の匂いが充満していて、あまり長居はしたくはなかった。忙しく作業する鑑識の邪魔にならないように避けて歩く。死体があるクローゼットの前に立つと、佐川は息を呑んだ。

「これは世にも珍しい、ダイニングメッセージだな」

倒れ伏す被害者の顔の横、血文字で「祐」と書かれている。ところどころかすれたり、極端に血が滴ったりしている。これを残すために最後の力を振り絞ったのだと想像し、佐川は合掌した。

「すっげー、こういうマジであるんですね」

登藤は無邪気に舌を巻いた。人間だれしも死体を前にすれば気後れするものだが、彼は埒外らしい。

「被害者は塩貝柚子。ペンション『ふおへん』のスタッフ。断定的にだが、死因はナイフによる失血死。遺体は死後硬直と死斑がではじめている」

岡田はメモ帳を読み上げ、「あとは解剖にお任せ」と付け加えた。

腕時計は十時三十分を指していた。死後硬直と死斑は、状況にも左右されるけれど、大体二時間以上経過すると現れる。とすると、推定される死亡時刻は、ちょうどチェックインが忙しくなる時間と重なる。

「凶器から指紋は出たんですか」

「ああ、べったりとな」

佐川の質問に岡田は欣然と応える。あの笑みは、関係者と照合すればすぐに片がつく、と高を括っているに違いない。佐川はダイイングメッセージについて、岡田の意見をうかがってみることにした。

「それにしても『祐』ときたか。どう思います」

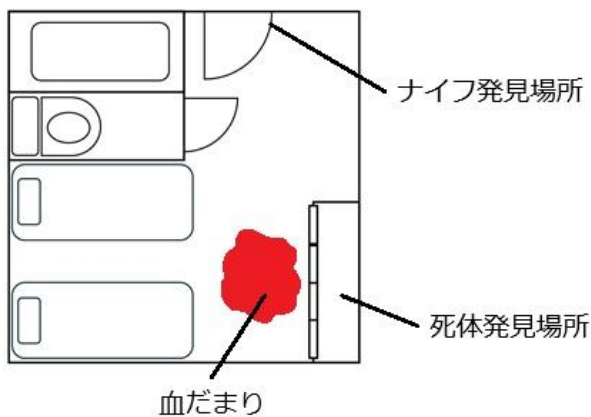
「ダイイングメッセージが法的証拠になるかよ、と。エラーリー・クイーンじゃあるまいし、それに常識的に考えて、一秒を争う状況で漢字なんて書いてる余裕はない。途中で力尽きた前例もある」

佐川は首肯し、息をついて軽く落胆した。所詮ロマンはロマンである。

実のところ、彼は血文字を前に興奮を隠していた。佐川としてその類のエンタメに夢中になった時期もある。こんな稀有な事例はそうそう巡り会えるものではなかった。

「次はこっちにきてくれ」岡田が親指で浴室の方を指した。

中を覗いてみると、こじんまりとした三点ユニットバスがある。大柄な佐川には少々せまこましいが、機能的にはこの程度で十分である。



「ん、何か散らばっている？」

登藤がしゃがみこんで目を凝らした。白っぽい薄片が樹脂の床に広がっている。

「バスソルト、ですかね」

若輩の疑問に岡田は木で鼻をくくるようにあしらう。

「そんな洒落たものには無さそうだ。第一、バスタブはすっかり乾いていて使った形跡がないじゃないか」

「とすると、ただの塩ですか。お祓い済みとは手回しのいいことで」

登藤も小気味よくジョークを飛ばす。

佐川はさして興味を示さず、ネクタイを締め直すと岡田に訊いた。

「聴取はまだですよ。ペンションの関係者はどこに？」

佐川はすぐに頭を切り替え、先輩刑事に質問する。

「一階の食堂に集まってもらっている。五人ほど」

「たった五人？」

違和感が佐川の口をついた。夏から秋にかけては繁忙期のはずだ。ペンションの従業員をあわせても五人しかいないとは妙だなと。

「『祐』って人がいたら一発なんだけどなあ」登藤がポリポリと頭をかいた。

「馬鹿言つてないで早く来い」佐川は戸口から後輩を促した。

食堂へ向かおうとしたその時、登藤が妙なことを訊いた。

「あれ。おかっさん、こっつて三階があるんですか？」

登藤が廊下の反対側を指していた。佐川は気になってその方向を見た。

突き当りの階段は一階に繋がっている。しかし、そのとなりで扉が隠然と開放放たれていて。手狭ながら上へ昇る階段が覗いている。

「あれは屋根裏に続いているんだ」

「なるほど。三角屋根ですもんね」登藤が頷く。

扉の先の暗闇は、視線を吸い込むような引力を発しているように佐川は感じた。気づくと彼は階段に歩を寄せていた。

「え、どうしたんですか先輩」

「逃げ損ねた犯人が実は屋根裏に隠れている、なんて可能性もある」

暗闇を前にすると、どうして引力を発しているのがわかった。

扉を境にして、フローリングが黒く濁った色をしていた。目を凝らすと金具も赤茶色に錆びている。屋根裏まわりはリノベーションしていないようで、それが小綺麗なペンションの中では浮いて見えるのだ。

「いつも施錠していないのか。不用心だな」

佐川は階段を注意深く上がり、顔だけ出して屋根裏の様子をうかがった。段ボールや未使用の備品が点々と置かれている。人が隠れられるスペースなどなかった。

窓が激しく震える。風は窓ガラスを突き破らんばかりに吹き付けている。今夜はかなりの悪天候だ。なにもこんな夜に殺害せずともよかっただろうに、と佐川は不満が湧く。そして、犯人がこちらの都合など考えるはずもない、と即座に否定するのだった。

■清水

闇夜に包まれた湖畔の道を二両の車が激走する。コーナーを曲がるたびに、猛追するスポーツカーとの距離は縮まっていく。次第に強まる後続車のハイビームをみとめ、清水は固唾をのんだ。

捕まりたくない。清水は自身の潔白を知りながら、盲目的に本能に従っていた。自分はやっていないのだから、抵抗せず弁護すれば良い。そんな考えは微塵もなかった。

ブウウン。バイブレーションが彼の太ももを揺らす。秋山のスマホが着信を受けているのだ。

ハンドルを片手に持ち替え、スマホを取り出す。発信者は見慣れない番号だ。0555の市外局番から、近辺の固定電話であることはわかる。

秋山への電話だ、清水が応答する必要はない。だが状況が状況だけに、その電話が差し差し伸べられた救いの手のように感じられた。清水は疑いやためらいなく、通話ボタンをタップしてしまった。

「――もしもし」

「あ！ 清水さんですか。今どこにいますか」

スピードカーから響いてきたのは秋山の声だ。はあと胸をなで下ろすような息遣いが聞こえる。清水はすがりつくように思いつくま喚いた。

「頼む、助けてくれ。きみと食堂で別れたあと、部屋に戻ったら突然死体が転がっていたんだ。俺はなにもやってない。落ちていたナイフを拾い上げただけで、人を殺そうなんて考えたこともない。絶対にだ」

「お、落ち着いてください――」

車が急カーブに差し掛かる。スピードを出していたせいで、車体は大きく外側にのけぞった。思わず両手でハンドルをきり、車道の中央に寄せた。

視界がぱあっと明るくなる。追手はほんの五メートル後ろまで迫っていた。清水は前方を向いたまま、落としたスマホを手で探る。

「もしもし。後ろの奴らを止めてくれ。あいつら車をぶつけてでも俺を捕まえる気だ。まったく正気じゃない」

足元に伸ばした指先にこつんと硬い感触。スマホを掴んで耳に当てると、力のかぎり訴えた。

「頼む、信じてくれ。俺は」

「信じます」

車内がさあっと静寂になる。自分の耳にしたことが信じられず、清水は「本当に？」と訊いていた。

「あなたが犯人だったなら、私からの着信に出ることはなかったでしょう。清水さんを信じます」

「嘘だ。疑っているんじゃないのか」

「ええ？ 信じて欲しいって言ったのは清水さんですよ」

秋山は驚愕して言う。彼女の言う通りなのだが、清水は安心感半分と拍子抜け半分で、すっかり戸惑っていた。秋山はおもむろに問いかける。

「彼らは、あくまでも状況証拠で清水さんを犯人だと決めつけています。警察が到着すれば、

明確な証拠をもって清水さんの潔白を証明してくれます」

警察という単語に清水は過敏に反応する。

「無理だろ。俺は落ちていたナイフに触った。追いかけてくるのが、追跡のアマチュアからプロになるだけだ」

「じゃあ清水さんはどうするんですか。逃げ続けるにも限度がありますよ」

秋山の反駁に清水は溜飲を下げた。そうだ、すべてのものはいつか終わる。いつまでも逃げながらえることなどできないのだ。もう終わりなのだ。

であれば、その終わり時ぐらい自分で決めさせてくれてもいいだろう。清水はペンションに來た理由に立ち返る。終わらせるしかない、俺の人生を。

「――あとは自分でなんとかする」

清水は「字路に差し掛かると、スピードも緩めずぐるりと曲がった。信号を無視したことで対向車が急ブレーキをかけ、次々と玉突き事故を起こしていく。彼はその様子をバックミラーで確認したものの、罪悪感や不憫さといった感情が湧いてこなかった。

「清水さん、清水さん」

「スマホ、返せなくてごめん」

苦々しく言い終えると、清水は電話を切ってしまった。

アクセルを最大まで踏み込む。後方から押し出されるかのように、彼のセダンはスピードを上げる。後続車も負けじと追いつがった。

気づけば、地面は舗装された道路から砂利道に変わっていた。道幅は狭まり、山家もまばらになっていく。水たまりをばしゃりと散らす音が虚しく響く。夜の闇は一層深まり、清水は光の当たっていない部分は存在しないかのような錯覚を覚えた。

清水はとにかく高い場所を目指した。落ち着いて首を吊る時間はない。それなら投身自殺をすればいい。頭から真つ逆さまに落ちれば、苦痛も一瞬で済む。

道は傾斜にさしかかる。車で山に入るにはこのあたりが限界である。アクセルをふかしてドンドンと鈍い音が車体に伝わる。追手のバンパーに追突されているのだ。メーターに目を落とすと、ガソリンの残量はすでに底をついていた。

「もう頃合いか」

清水は車を捨てる決心をし、アクセルに右足を付けたままシートベルトを外した。右側のドアを解放する。彼はそのまま車外へ身を投げだした。

地面に体がついた瞬間、紐で引っ張られたように、清水の身体は吹っ飛んだ。視界は変転し、天地がひっくり返ったような衝撃が脳をかき混ぜる。背中から全身に響くような激痛が走った。一瞬の出来事だったが、清水には一分にも一時間にも感じられた。

金属がぶつかるような突発音が雨夜の山林に轟く。重い頭を上げて見てみると、二両の車は大樹に突っ込んでいた。プスプスと白煙が上がり、湿った空にたなびいた。これ以上の走行は不可能のようだ。

はやくこの場を立ち去らなければ。痛めた身体に鞭を打ち、清水はやおらに立ち上がる。一歩一歩が短い。いつもの半分以下だ。まるで歩き方を忘れたかのように、彼は生まれたての子鹿の如くふらふらと前進する。自分の身体をこんなに重く思ったことはなかった。「ふっ、ひっ、ふっ」

呼吸音ともいえない空気の抜ける音が清水の喉から鳴る。横隔膜が上手く働かず、浅くなつた呼吸が彼を苦しめる。

木にもたれて呼吸を整える。次の木に向かって歩く。そうしてまた一息。小休止を繰り返しながらぬかるんだ急斜面を進む。

五メートルほどの高さまで登ったとき、スポーツカーのドアが一斉に開いた。清水を追う者たちが車内から湧いて出る。彼らはキョロキョロと周囲を見回し、やがて清水を見つけて「あっ」と叫んだ。

「いたぞ、あそこだ」

彼らは列をなして一直線に清水へ追いかける。そのとき、車のヘッドライトぶつりと切れて、周囲は完全な真つ暗闇になった。

「うわっ」

世界が真つ黒に塗りつぶされ、清水は動転する。無我夢中で辺りをさぐると、ガサガサとした感触が掌を掠った。

「――痛え」

樹皮に勢いよく触れたのだとわかったのは、掌の痛みが引いてからだだった。細長い破片がしめりけを伴って手にくつつく。おそらく檜だろう。

「どこだ」

怒号が森林にこだまする。彼らは清水の居所をつかめていないようだ。

好機だった。清水はとにかく高い場所を目指し、腰を曲げながら手探りで斜面を上がつていった。

■佐川

佐川は食堂に足を踏み入れて戸惑った。暖炉前の座敷に六十代ぐらいの男性が横になっている。

「先輩、第二の事件ですよ！」登藤が佐川の袖を引っ張る。

「違う、あれはオーナーだ。現場を直視して、気絶したらしい」岡田が登藤を制する。

寝込む男性の傍らに女性が正座していた。年齢はオーナーより一回り年下で、若いころはきれいだったろうと佐川は思った。死体を目の当たりにして相当ショックだったのだろう。悄然と青ざめている。これが普通の反応だ、と佐川は登藤を一瞥して鼻を鳴らした。

「失礼、奥様ですか」

佐川は警察手帳を片手に起立するよう促す。良い警官の本領発揮である。

関係者たちを所轄の警官たちに任せ、三人は彼女を連れてラウンジまで移動する。

彼女は伊東潤子、五十五歳。専業主婦として働き、夫である伊東竹が定年してからはこのペンション「ふおへん」で家事全般を担当している。

「あの、柚子ちゃんは本当に亡くなったんですか？」

一人掛けのソファが大きく見えるほど縮こまり、未だに信じられないといった様子で顔を伏せている。口ぶりからして彼女は現場に近づいていないのだろう。佐川は穏やかな物腰で応えた。

「はい、本当に残念に思います。彼女の無念を晴らすためにも、ご協力をお願いします」
「え、ええ。答えます、なんでも」

「まずは、今夜は何をされてましたか」佐川は肩肘を乗り出して訊いた。

「あれはたしか、六時半頃でした。柚子ちゃんが見当たらなくて、急遽わたしが夕食を担当したんです。それから九時までスタッフ総出でキッチンにいました」

登藤がせつせと聴取の模様を手帳に書き込む。

「スタッフが総出で？ それですと、誰かが侵入しても気づくことはできないのではありませんか」

「そんなことはありません。正面玄関はドアベルがありますから、たとえば食堂に居ても来客がわかります」

「なるほど。六時半より前はなにを？」

「倉庫の片付けをしていました」

「倉庫というと、あの屋根裏ですね」

佐川の確認に彼女はあっさりと首を横に振る。

「一階の倉庫です。屋根裏は夏のバーベキュー道具をしまっているくらいで、私たちはほとんど立ち入りません」

彼女は「一応外付けの非常用梯子があるので、たまに点検に行く」と補足した。

「今日はお料理の提供が遅れたんです。久しぶりにやるものですから、レシピや道具のしまい場所をど忘れしちゃって。それに調味料が切れたり、色々てんてこまいだったんですよ」次第に彼女の舌が回ってゆく。

佐川は脱線する気配を察し、話の腰を折る。

「ありがとうございます。ほかはどうです、彼女はどんな人物でしたか」

「えっと、柚子ちゃんは半年前からうちで働き始めたんです。わたしなんかよりよっぽど料理ができる子だったので、キッチンはほとんど任せていました」

あとは、と潤子はしどろもどろになって語る。

「前のお仕事について訊いたことがあるんですけど、そのときはなんだか、はぐらかすような感じでした。夫とも話したんですけど『水商売でもやってたんじゃないか』って」

「水商売ですか」と佐川は鸚鵡返す。

「はい。彼女、ピアスとかお化粧とか、とにかく派手でしょう。それっぽい格好してたら勘ぐってしまうのも仕方ないですよね」

答に詰まり、佐川は「はあ」とだけ返した。彼はいまひとつ被害者の人物像を掴みきれていなかった。前職が気になるが、遺留品から正確な身元が割れるのを待つしかない。

「ほかにはどうですか。彼女の人間関係とか」

「そちらもわたしは知りません。彼女と話していると、気づいたらわたしだけが喋っていて」ふむ、と佐川は顎を撫でる。塩貝は話術に長けていたのかもしれない。相手に気づかれぬよう会話の流れを操作し、詮索させないようにしていた可能性も考えられる。

「関係といえば、柚子ちゃんはユウゴくんに言い寄られていました。結局付き合ってはなかったみたいだけど」

佐川の眉がピクリと疼いた。手帳に書き留めていた登藤も顔を上げた。

「そのユウゴくんというのは」

「うちで雇っているもうひとりのスタッフです。彼、釣りに凝っていて、冬になると連日ワカサギ釣りに行くんです。女好きなのが玉に瑕ですけど――」

「彼の名前をここに書いていただいてもよろしいですか」

佐川は登藤のメモ帳とペンをひたたくって伊藤潤子に渡した。彼女は悩むことなくスラースラとペンを走らせる。

寺尾祐悟。丸っこい文字ではっきり書かれている。

「『祐』きたあ」

登藤はかすかにつぶやき、小さくガツポーズをつくった。

「寺尾祐悟さんはどちらに？」佐川が前のめりになって訊いた。

「お客さんのひとりを――多分あの人が犯人だと思っただけ――祐悟くんたちが捕まえようと追いかけていきました。わたしは止めようとしたんですけど」

登藤が彼女に近づき、テーブルを叩いて一喝する。

「なんでえ、先にそれを言わなかった！」

「そんな、わたししてっきり……うう」

潤子はそので嗚咽し顔を伏せてしまった。

やりすぎだ。佐川はちらと岡田を見やる。岡田は、こちらも初耳だ、と渋い顔でかぶりを振った。

「どこの馬鹿だ、報告しなかったのは」

佐川は関係者に聞こえぬよう小さく毒を吐いた。警察にとって仕事における失敗の重みは一般の職種とまるで違う。だからハウレンソウは命のより大事であると日頃教えているというのに。

「追いかけている奴らを保護。監視カメラから映像から車両のナンバーを特定」

岡田は懊悩した様子でぶつぶつとタスクを唱えた。

■石田

「最悪だぜ」

目を血走らせるドライバーを横目に、石田は心配で胸がはち切れそうだった。彼が気がかりなのは運転手ではなく、疾駆する愛車の方である。納車したての赤いスポーツカーには、葉っぱ一枚くっつくことも許せない。まして傷がつくなんてことは言語道断である。にも関わらず、愛車を他人に運転させている理由は、この寺尾というペンションのスタッフがこの上なく殺気立っているためだ。

「くそっ、上手く走れねえ」

寺尾はマニュアル車の操作に不慣れなようで、追跡しているセダンとは雲泥の性能差であつても追いつけない。しかし「下手くそな運転してないで俺と代われ」なんて、とても口にできなかった。

「スポーツカーとか初めて乗ったわ」

「かっこいいー」

「狭えー」

後部座席では、大学生三人組が喧々囂々にとりとめのない会話を弾ませる。

「それにしても、あのおじさんが人を殺すとは思わなかったね」

山路はあっけらかんと言った。石田は首肯する。

「病んでいるというか、やつれているというか、とにかく不気味だった。犯罪に手を染めているのも納得だね」

寺尾も鼻息を荒らげて続いた。

「ああ。あいつがやったに違いないんだ」

「いや、でもな」小林が恐る恐る口を開く。寺尾の反感を買わないか怯えているのだろう。車内の視線が小林に集まる。

「あのおじさんも泊まり客ってことは、殺された相手も初対面でしょ。なんで殺すのか、俺よくわかんなくて」

「あいつが殺人鬼ならどうだ」

寺尾はピリピリしながら言う。

「殺人鬼は理由なく人を殺す」

「狂っているようには見えませんでしたよ」小林も食い下がる。

「でもなあ」石田は口をはさむ。

「殺人鬼かどうかなんて見分けられるはずがない。まずは今ある事実を信じるべきだろ」

車は清水のセダンを猛追し、同程度のスピードで「字路を曲がった。交通事故を目の当たりにし、寺尾は怒りを露わにする。

「やろう、さらに無関係な人を巻き込んで。許せねえ」

「おい、もう少し安全に運転してくれよ」

石田は肝をつぶして叫んだ。あわや廃車という事故が発生しているのだ。寺尾にまかせているのが気が気じゃない。早く追いついてくれと願うばかりだった。

山道にさしかかると、傾斜のせいもあって前方のセダンはへろへろと速度を鈍化させた。坂道は馬力が物を言う。自慢のスポーツカーがついに清水を追い詰める。しかし、石田にはひとつ懸念点があった。

「寺尾さん。わかっていると思うが、追い越して停車させるんだ。絶対にぶつけちゃ——」

「うるさいな。集中が散るからいちいち口に出すな」

瞬間、車間距離が急に狭まり、バンパーのひしゃげる音が鳴った。

「あー！ バカバカ、なにやっているんだよ」

「おいやめろ、ハンドルを動かすな」

ドン。車体と石田が悲鳴を上げる。車内は混沌とした様相を呈す。ふたつの車は連結したように坂を登りきり、巨木に正面から激突した。

凄まじい衝撃音で思考が停止する。けたたましいホーンと首の痛みで、石田は意識を取り戻した。

「うう、最悪だ」

よろよろと体を起こす。石田の車は、フロントガラス全体に白いヒビが入り、フェイス部分はべこりと陥没していた。修理代はいったいいくらかかるのだろうか。あの寺尾は修繕費を支払ってくれるのだろうか。今だけ石田は運命を信じる気になった。最悪は次なる最悪を呼び込むに違いないのだ。

「なにしている。早く来い」寺尾が石田を叱りつける。「見ろ、あいつが逃げちまう」
ふっと視界が真っ暗になる。

「おい、ヘッドライトが消えたぞ」

「逝っちまったんだよ。どうしてくれんだ、俺の車！」

石田は感情的に膝を殴った。

「流れでついてきたのが間違いだっただ。あんた頭が沸騰しているぜ。なんで追いかけてうだなんて」

「好きだったんだ」

寺尾の声音は鼻にかかるようで、か細く震えていた。

「言えなかった、結局」

「――悪かった。そんな理由とは」

石田は愕然としてこもっていた力を抜いた。

前照灯が壊れていて良かった、と彼は考えていた。自分がどんな表情をしているか見られずに済んだためだ。

「一発でいい」

寺尾の調子が力む。

「一発でも殴らないと気持ち収まらない。なにより彼女が報われない」

「ああ、くそ。わかった。あんたに協力するよ」

スマホのライトを点灯する。白色の電光が暗闇を退けた。

「ひとつじゃまだ暗いな」

寺尾も鼻をすすった。

「ふたつあれば心強いだろ」

石田はにやりと笑った。照らし出す光が、彼の深いほり顔に色濃い影を作った。

■佐川

エントランスの空気は張り詰めていた。その原因である岡田はソファにかけて腕を組み、パタパタと人差し指で叩いている。その拍子が段々と早まるにつれ、現場の捜査員たちは冷や汗を浮かべた。

佐川もそのひとりだ。

岡田のせっかちは頭一つ抜けている。登藤は彼のことを「悪い意味だから頭一つ埋もれている人」と茶化している。

岡田が江戸っ子気質なのかと思えばそういうわけでもない。紀州生まれで関東の血はほぼゼロに近い。

佐川は彼の過剰な攻めつ気を、欠点ではなく全員の尻を叩くペースメーカーとして評価している。彼の存在あってのスピード解決は両手で数えられない。間違いなく良い刑事ではあるのだ。

それはそうと、岡田の激高を受け止めることは頗る恐ろしいわけで、佐川と登藤は、岡田を視界に入れぬように会話している。

「ペンションの予約台帳を確認したところ全六組、八名が宿泊していたことが判明しました。」

前日から『天津風』で宿泊していた八千谷茂、二十九歳。

『唐紅』に泊まる鈴木寧、三十四歳。

『花色』の秋山翠華、二十七歳。

『鏡山』の小林伸二、園田圭斗、山路達也、いずれも十九歳。

『山風』の石田透、三十二歳。

そして犯行現場となった『宇治山』の清水慶次郎、三十五歳。

逃走した彼を寺尾、石田、小林、園田、山路が追跡しています」

一連の情報を報告し終え、登藤はこっそりと佐川に耳を打った。

「先輩、はやく彼らを見つけないとまずいですよ」

案じているのは彼らの安否か、それとも我が身の方か。おそらく後者だろう、と佐川は岡田の機嫌をうかがった。

「わかっているんだ、そんなことは。早く見つかるように願うしかないだろう」

「はあ。気まずくて嫌だなあ。先輩、気が紛れてタメになりそうな話題はないんですか」後輩の無茶ぶりに佐川は唇をへの字に曲げる。

「そうだな。このペンションの名前、たしか『ふおへん』だったろう。あれはたしかスペイン語だ」

「え、何言っているんですか。フランス語ですよ。森って意味です」

佐川は閉口し、口元を押さえた。熱くなった顔を隠すためだ。

「ほかにないんですか。ここの室名が六歌仙からつけられている、とか」

「どうということだ」

「先輩、『ちはやふる』とか読まないんですか。俺なんかすぐ気づきましたよ。ここの室名は、百人一首に選ばれた六歌仙の歌からもじっているんですよ。ちなみにうんちく自慢させてもらうと、六歌仙は古今和歌集が初出なんです。紀貫之が人気の俳諧を列挙して、それはもうボロクソにこき下ろしたんですよ」

佐川がなるほど手を打つ。

「へえそう。たしか六歌仙は順番があっただろう。テストのために語呂合わせで覚えたものだ。もしかすると、二階の室名は六歌仙の順で並んでいるのかもな」

「いや、そういうわけでもないんですよね」

「違うのか」

「厳密には、半分合っていて半分間違っているといえますか」

そのとき、ピリリと呼び出し音が鳴り響いた。

岡田が慌てて携帯電話を耳に当てる。

佐川は次第に晴れていく上司の表情から、清水らの行方が掴めたのだらうと理解した。

「喜べお前たち」

岡田がボタンと携帯を閉じる。

「清水の車が見つかった。西湖を北上した後、車を乗り捨てて、どうやら今は山中へ逃走しているらしい」

岡田は「聴取は任せたぞ」と言って、そのまま揚々と現場へ上がっていく。後ろ姿を見送ると、彼らの緊張の糸がぷつんと切れた。

清水の泊まる部屋から死体が発見されたわけだが、本当に彼が犯人なのだろうか。それとも、信憑性の薄いダイイングメッセージが示す、寺尾が犯人なのか。捜査員を派遣し、近辺を捜索させているものの、彼らの発見までまだ時間がかかるだろう。

佐川はさらなる報告に期待しつつ、関係者の聴取を続けた。

「あなたが通報なさったんですね」

登藤を傍に立たせ、佐川は向かい合って座る秋山に訊いた。化粧をしていない女性と話すのは、妻を除くと学生時代まで遡るだろう。

「はい。どたばたしていましたら、私が代わりにペンションの電話で」

彼女はきつと唇を結び、毅然とこたえた。

「大変でしたね。それはそうと、なぜ通報の際に『宿泊客が容疑者を追っている』と伝えなかつたんです？ あなたは殺人のことしか口にしなかつた」

「それは」

彼女は顔色を崩さなかつたが言い淀む。

「死体を見て動揺して」

「死体が増えたら、どう責任とるつもりだあ？」

登藤が上から覗き込むようにどやしこむ。

「――すみません、私うっかりしていて」

秋山は頭を押さえる。その仕草は若干芝居がかつているけれど、ここで彼女をゆすつても仕様がなない。

「六時から九時にかけて、なにをされていましたか」

「六時ですと、ペンションに着いて荷解きも終えたからシャワーを浴びていました。それから七時に食堂へ来て、夕食をいただきました。部屋に戻ったのは八時半頃です」

秋山は自身の行動をつらつらと説明した。この落ち着いた様は佐川も舌を巻いた。まるで準備してきたかのような整然とした供述だった。

「刑事さん。実は私、清水さんと、あの塩貝って人に廊下で会いました」

「ほう。詳しく聞かせてください」佐川の目がきらりと輝く。

「六時半ごろだったと思います。そのときはドライヤーを借りたくて、清水さんをスタッフと間違えて話しかけたんです。それがちょっと騒がしかったみたいで、塩貝さんに注意されました」

「それから。それからどうしたんだ」登藤が待ち切れない様子で訊いた。

「部屋に戻りました。髪を乾かし終えていなかったの」

「清水さんと塩貝さんがその後なにをしていたか、おわかりになりますか」佐川が訊く。

「清水さんは自身の部屋に。塩貝さんはたしか、清水さんとなりの部屋に入っていきました。記憶が曖昧ですみません」秋山はぺこりと頭を下げる。

通報は八時五十分頃。六時半に秋山が目撃したということは、それ以降に殺されたということになる。清水が塩貝と接触していることから、普通ならこのタイミングで殺害に至ったと考えられる。しかし、塩貝が別室に入っていたというのはなぜだろう。

「ちよっと、いいですか」秋山はおそるおそる尋ねる。

「なんでしよう」

「刑事さんは、その、清水さんがやったと、考えていらつしゃいますか」

「あのなあ、大事な大事な捜査情報をお、あなたに教えるわけねえだるお？」

登藤は往年のつっぱり不良のようにポケットに手を入れて肩を揺らす。

「私は、清水さんがやったとは思えなくて」

「なぜ、そう思うのです」

佐川は我知らずそう返していた。

「殺された部屋に入った時、床に血が溜まっていました。ほんとうにたくさん。だから、きつと犯人は返り血を浴びているはずなんです」

突如始まった秋山の卓論に、警察一同は目を白黒させた。ただひとり、佐川だけは彼女の話を傾けている。観察することで事件解決の糸口が発見できるのではないかと、と刑事としてアンテナが敏感に反応していたのだ。

「でも清水さんは、最初に会ったときも、食堂で話したときも、逃げるときでさえ同じ服装でした」

「なるほど。あなたの言いたいことはよく理解できました」

佐川はにこやかに告げると、用は済んだとばかりに席を立った。彼の思う聴取の核心とは、必要な情報だけを聞き出すことにある。余計なことまで聞いていたら捜査が混乱してしまう。また、それを態度で相手に示すことも重要なテクニクなのだ。

「お疲れでしょう。まだここに留まって頂く必要がありますが、ゆっくり休んでください」

秋山を食堂へ下がらせると、登藤が鼻息を荒立てて言った。

「先輩、秋山の推理を聞いて正解でしたね」

「それはどういう意味だ」

「返り血ですよ。考えてみれば、血のついた服を持っているやつが犯人です。全員の荷物を改めれば即解決ですよ」

「ある程度水をはじく素材なら洗い流すことも可能だ。濡れた服も持っていないか確認するべきだ」

「たしかに。その証拠さえ見つければ『濡れ衣だ』とは言い逃れできませんね」

佐川は無視して話題を変える。

「それにしても今回の事件、警察の目を誘導しようという意図を感じる」

「先輩はニュータイプかなにかですか」

登藤は佐川のスルーに納得いかない様子だ。

「秋山のことだけじゃない。あのダイイングメッセージもそうだ」

二階からドストドスンと踵を打ち付ける音が降りてくる。鳴らしていた主は、手すりを頼みの綱のように両手でしっかり握って体重を支える、岡田であった。

「面白いものが見つかったぞ」

登藤は待つてましたと指を鳴らした。彼は岡田からポリ袋に入った紙切れを受け取ってじっと目を凝らす。

「これは」佐川は言葉を切ってつばを飲み込む。「うちで配っている『自殺相談ダイアル』のチラシですね」

「ああ。この部分を見てみる」

岡田が指し示した部分は、よれてシワになっていた。インクが剥がれて木の断面図のような模様が表れている。

「指紋だよ。おそらく紙を押さえる左手が相当汗ばんでいたんだろうな」

ふたりの間で顎を撫でていた登藤は思い立ったように岡田に訊く。

「どこから見つけてきたんです？」

「清水唯一の持ち物、ジャケットの懐から出てきた。指紋は間違はなく奴のものだ」

「すると清水の動機は、心中の相手に塩貝を選んだ、ということなのかも」

「ありそうな線だ。あとはナイフについた指紋と照合すれば、犯人は清水で決まりだな」

登藤が「そうですか」と明るく笑顔を浮かべた様を佐川は観察していた。指紋を当てにする岡田とは対象的に、返り血を浴びた服を持っていないという点で、寺尾が犯人だと合点したのだろう。当の佐川は、誘導されているのではないか、という疑念を払拭できず、容疑者を決めかねている。刑事たちは三者三様に意見を別れさせた。

ところが、事件はすぐに展開を見せる。チラシとナイフの指紋が一致し、正真正銘、清水慶次郎のものであると指し示したのだ。

血の付いた服はおろか濡れ衣も発見できず、警察は清水への疑いを強めていく。

ただ一人、佐川だけはわだかまりが晴れずにいた。

■清水

清水は斜面を這うように登りながら、肺の奥が焼ける感覚に耐えていた。靴底は泥に取られ、踏み出すたびに身体が沈んで、引き戻される。上を目指しているというより、ただ追いつかれないために動いているだけだった。

雨脚は一向に弱まる気配を見せない。滴る雨粒はほてった身体から急激に体温を奪い去る。清水の手足は氷のように冷めきり、ブルブルと震えていた。

こんな足で山肌を登り続けるなど到底不可能である。清水は背後から段々と近づく懐中電灯の光を感じていた。このままでは捕まってしまう。

伸ばした手に滑らかな感触が伝わる。岩肌だ。ペタペタと探ると、目の前は岸壁のように高く岩が露出し、左右から回り込まなければならぬようだ。

清水は岸壁を右手に歩を進めた。時計回りに登っていく構図だ。ざあと低い音が木々の奥から響いている。この先に川があるのだろう。急な斜面にこの雨だ、激しく氾濫しているに違いなかった。

「うわあ」

清水の予想通り、山頂部に降った雨が集結して、滝のように流れていた。その勢いは凄まじく、足を踏み出せばひとたまりもなく麓へ滑落してしまうだろう。

なにか掴めないか。清水はスマホの画面を月光もない夜闇にかざした。

喬木が繁茂する山面は、川を避けるように広葉樹のすき間から空がのぞく。そこから日光を一身に受けるように、フジザクラが枝を伸ばしていた。まるで川の向こう側から手を差し出しているようだ。

これだ！ そう確信したのもつかの間、清水は枝を掴んで激流の横断を試みた。冷たい感触がふくらはぎの中頃まで覆い尽くし、びりびりと痛めつけてくる。越境は可能そうだが、足先の感覚が遠のいていく様は、身の危険以上の恐怖だった。

はじめはたゆんだ桜の枝も、幹に近づくにつれて強度をなした。もう少しでいけるぞ、と清水は半分を過ぎたあたりで自らを鼓舞する。

「見つけた」

背後から声をかけられ、心臓が弾けた。顔だけ声の聞こえた方向に向けようとすると、同時にどしんと衝撃が襲う。太い腕が回され、清水は巨体に抱きつかれた。

追いかけていた園田が、清水の渡川の隙をついてタックルをしかけたのだ。完全に虚を突かれた清水は膝から崩れた。踏ん張る力が抜け、流水に大きく引っ張られる。

「うわあ」

園田は激流の危険を顧みず、いや危険とも思わず組み付いたのだろう。あつという間に足元をすくわれ、流されまいと必死に清水に掴まった。

「ぐうっ」

清水は両手でなんとか枝にぶら下がる。だが水流に揉まれながら二人分の体重を、それも筋肉達磨な園田を腕だけで支えるには、まるで力が足りない。引き揚げるどころか、ずるずると滝壺へ向けて沈んでいく。

「やばいやばいやばい、死ぬ死ぬ死ぬ！」

園田は甲高く助けを乞いた。その叫びを聞きつけ、追手たちがぞろぞろと川端に集合する。

「圭斗、今いくぞ」

小林が駆け出し、それを見た石田がすかさず制した。

「だめだ、お前も流されて終わりだぞ」

「じゃあどうするんだ」山路がすごい剣幕で石田の胸ぐらを掴む。「圭斗が死んじまうぞ」すると、寺尾がスツと歩み出た。ぎしぎしとなる枝を持つと、力いっぱい引っ張った。

「ぐおお」

彼は歯を食いしばり、ぐいぐいと枝を上げていく。枝に掴まっていた清水たちはしぶきの中から引き揚げられる。

「お前も見えていないで手伝え」

学生たちも支えるのに協力し、ふたりは水面から抜け出した。清水は何度も流れに弾かれながらも再び川底に直立する。

そして、向こう岸を指して再び進みはじめた。園田を助けるついでだったとしても、救ってもらったことには感謝する。

とはいえ、みすみす逮捕されてやるつもりはない。清水は決死の横断を継続した。

「あいつ、まだ逃げるつもりだ」石田が蛮声を張り上げる。

寺尾は清水を逃がしてしまうことをとっさに忌避したのだろう。枝を支える手を放してしまった。

「うおっ」

急に枝に重みが増し、小林と山路が弾き飛ばされる。枝は最前以上にしなり、メキメキと音を立てて裂けて落ちる。

清水は頼りがなくなり転倒する。全身が重力に支配された瞬間、即座に右手を伸ばした。

「圭斗！」

学生たちが悲鳴を上げる。しかし、依然として清水たちは川中にとどまっていた。

清水が本能的に伸ばした右手が、しっかりと枝を掴んでいた。小指がちょうど枝の分かれ目に引っかかり、片手でも体重を支えるほどの握力を補助してくれた。

「はあっはあっ」

荒い呼吸を他人事のようにうるさく感じながら、清水は園田に目を落とした。疲労困憊といった表情で、なにも考えず、ただ本能でしがみついている。彼はもはや追う者の色を失っていた。

このまま足蹴すれば彼は滑落し、清水は楽に逃げることができる。ゆっくり首を吊る猶予ができるだろう。散々な目にあってきたのだ、これくらいやって当然。

次の瞬間、園田と目が合った。清水がなにを謀っているのか理解したのだろう。助けを求め視線が、清水に突き刺さる。園田も死にたくないのだ。

清水は目を逸らした。これは見てはいけないものだ。人の死に顔なんて道端のガムみたいに、脳にこびりついて忘れられなくなる。クスリを買った奴らがどうなったか聞かないのと同じで、後悔するに決まっている。

だが、清水は園田に発破をかけると、左手を回して彼を引き寄せた。

「おい。お前も死にたくなかったら、掴まっているだけじゃなく自分で立ちやがれ」
俺は何をやっているんだ。

清水は自問自答した。行動と思考とがまったく乖離していることに気づいたのだ。彼はたしかに園田を見殺しにしようとした。にもかかわらず、助けようなどと思つする暇もなしに、反射的に救いの手を差し伸べていた。

いや、それ以前から矛盾はあったのだ。清水は心の内で「死にたい」と何度も訴えているのに、身体は死の危険を前にして、懸命に生き残ろうと努力している。

自分は生きようとしていないか。清水がそう思い至るまで時間はかからなかった。

そうに違いない。大学生と気持ちよく談笑する奴が、自殺するなんて変な話だ。清水は死にたくなどなかったのだ。ただ現実から逃げたい、という強い欲望が、間接的に希死念慮と結びついただけだったのだ。

秋山の指摘が思い起こされ、それが正鵠を得ていたことを痛感した。彼女は初対面の自分を心配してくれたのに、そうとも知らず、清水は冷淡にも追い返してしまった。彼は忸怩たる思いでいっぱいになった。

園田は鍛え上げられた足腰で水流の元に屹立すると、邪魔をせず、口を開かず、ただ清水の後ろに付いた。清水は、いつまた寝首をかいてくるかと警戒し、折々首を振ってみたが、弱々しかった眼差しが嘘のように神色自若たる態度で見つめ返された。

果たして彼らは川を渡りきった。疲労感がどっと身体にのしかかり、園田を横たえて川辺

にへたりこむ。樹下は雨をしのげたが、風はひどく通った。身体を縮こまらせて震わせ、齒をガタガタと揺らした。

これでは低体温症で死に至りかねない、と清水は総毛立った。以前、ドライバー仲間効率のなびールの冷やし方を教えてもらったことがある。ティッシュを水で濡らし、それを缶に巻き付けて冷凍庫へ投入する。すると、ものの十分で居酒屋のビールサーバーで入れたような、キンキンに冷えた代物が出来上がるというのだ。試したことはないけれど、現に自分が似たような状況で震えているのだから、眉唾ではないらしい。まさにその理屈で死にかねるとは思いもよらなかった。

清水は園田を一顧する。彼もぐったりとしているが、いずれ友人たちが助けしてくれるはずだ。彼は捨て置き、いち早くこの場を離れる方が賢明だ。

「まだ逃げんの」

そのとき、園田がうわ言のように呟いた。清水は振り返る。

「早く捕まったほうが楽でしょ」

そんなことはわかっている。わかっている目を逸らしていたのだ。清水は向き合わねばならない現実には唇を噛んだ。血は出なかった。

■佐川

鈴木寧。高校で古文の担当教員を務めている。佐川の前に鎮座する人物は、生けられた花のように体幹のぶれもなく背筋が伸び、まさしく聡明という言葉がふさわしい。

佐川にとって、教師という職業は特別以外のなにもでもない。高校生の頃に提出した進路希望には、教育学部が軒並み羅列されていた。

きっかけは現代文の授業だった。初老の男性が担当で、年齢に裏打ちされた話術、悪く言えば鈍く訛った喋りが特徴であった。しかしどういいうわけか、彼の授業を受けていると、物語に登場する人物が立体的に想像できたのだ。インクのシミ程度に映っていた教科書の文章も輝いて見えた。

彼の受けた洗礼が青臭い少年の心を動かしたのは必然だった。結局教職に就くことはなかったが、そういうわけで、佐川の刑事としてのアンテナは最高感度まで高められていた。

「今日の六時から九時、ですか」

鈴木は臉を三日月に細めて淡々と語る。

「私は七時すぎにチェックインしたので、六時ですと、こちらに向かう途中ですね。七時半前に食堂に降りて、二階へ戻ったのは八時二十分あたりです」

「それ以降は部屋に？」

「はい」鈴木は刑事の双眸をじっと見つめる。佐川には、瞳孔を通して脳の中まで覗き込んでいるかのように感じられた。

「ありがとうございます。ほかに伝えておきたいことはありますか」

「――いえ、なにも」

鈴木はフリーズしたように逡巡し、目を泳がせる。なにか隠している様子だと佐川は感察知する。

「どんな些細なことでも大丈夫ですよ。事件に関係なくとも構いません」

「はあ、そう言われても」

必要な情報だけを聞き出す、という佐川の哲学に背いているかのように見えるが、それは誤りだ。相手がなにか隠している場合は、とにかく接触時間を長くすることである。人間は問答において隠したい情報ほど返答に時間がかかる。理由は単純、自分の不利にならないか思考するためだ。何気ない会話を続ければ、相手が返答に困る質問を見つけ出すことができる。

以前この話を登藤にすると「メンタリストみたいですね」と返された。もし世の中の犯罪件数がゼロになったなら、メンタリストへの転職も考えよう。

「今日はどちらから」

「名古屋です」

「そうですか。自家用車はお持ちですね？」

「ええ。ないと困りますから」

「渋滞が大変じゃないですか」

「そうですね。通勤は郊外だから問題ないですけど、塾の送り迎えはすこし」

佐川の眉間にシワがよる。こちらがさぐりを入れていると気取られぬように自然体をこころがけ、彼は同じ調子で続ける。

「塾。ということは、お子さんがいらっしゃるのですか。ご立派ですね」

ちらと彼女の左手を見やる。指輪はおろか、はめていた痕もない。

「――そんなことは」

「まあまあ、謙遜なさららないで。子育ての苦労は、私も多少は理解しているつもりです。だから、どんなに偉くなっても、うちじゃあ女房に頭が上がりません」

「刑事さんこそ、奥さんを大事にしているところが立派ですよ」

「どうも。お子さんはおいくつですか」

「早いもので、もう六年生です。今は塾の勉強合宿に」

「中学受験！　さすが、親子鷹とはまさにこのことですね」

「――やめてください、そんな」鈴木は陰った微笑みで言う。

収穫はあった。佐川は姿勢を崩して平然と取り繕う。

「すみません、話が脱線してしまっつて」

「あの、刑事さん」

鈴木はおもむろに顔を上げた。唇をきゅっと結び、表情は悲壮感すら漂わせる。しかし鬱勃としていた雄々しさはたちどころに消失し、枯渴した勇気をたえず呼び戻そうと努力しているようだった。

「どうかありませんでしたか」

「――いいえ、私はこれで」

彼女が席を立とうとしたとき、筆記に執心していた登藤が行く手を阻んだ。

「ちょっと待ちなさい。もう一度座って」

「は？」

そうこぼしたのは佐川だった。後輩が突然、女性口調で尋問を始めたのだ。顔をしかめる佐川をよそに登藤は続ける。

「あなた、八千谷って男かなり親密みたいじゃない。聞いたわよ、夕食の時キスまでしたって」

「それは」

「あなた達の関係、白状して貰おうかしら」

登藤の奇矯な尋問に面食らい、鈴木は恐る恐る口を開く。

「はあ。たしかに、私と茂は付き合っています」

「それだけ？ 愛し合うふたりが別々の部屋にいるはずないわ。女の勘を甘く見ないで」

鈴木はため息をつき

「ペンションに着いてからはずっと茂の部屋、『天津風』で一緒にいました」

「本当にずっと？」

「それは、違いますね。夕食から帰ったあとでしたね、彼は忘れ物をしたと言って部屋を離れました」

「時間にしてどのくらい」

「五分とかからず」鈴木は元の調子できっぱりと答えた。

鈴木を食堂へ帰り、次は八千谷を呼び出す。八千谷を待つ間、登藤は勝ち誇ったように胸を張る。

「いやあ、僕の名演技が光りましたね」

「聞きたいことがある。色々」

佐川は腕を組んで後輩をじろりと睨む。

「オネエ口調のことですか？ 試行錯誤の一環ですよ。オネエは強キャラって相場が決まっています」

「それもだが、いつの間に鈴木と八千谷の関係に気づいたんだ」

「ああ」登藤が手で相槌を打つ。「タレコミがあっただんですよ、秋山から」

「お前、いつの間に」

「でも役に立ったんじゃないですか」

「だとしても、一般人に良いように使われているんじゃないぞ」

ふんと鼻を鳴らし、腕組みをしてソファに座ると、鈴木のことを脳裏に蘇った。会話の中でいくつか返答に遅れた質問がある。そこから逆算すると、ある想像が佐川に喚起される。まったくこじつけであり、事件との関係性もない。どうしてこんなことを考えてしまふのかといえれば、彼女が教師であること以外に原因は見当たらないのだ。

◇

「ではお話を聞かせてください、八千谷さん」

「ひゃい」

アラサーの男性は身を飛び上がらせ、まるで追い詰められたモルモットのように半べそで声を上げさせた。

鈴木の関係について揺さぶりをかけるとあっさり認めてくれたのは良かったのだが、これが虫酸が走るほど訥々とした喋り方で、佐川はなんとも聞き返すはめになった。

「つまり、昨日から宿泊していたあなたは六時頃にペンションに戻ってきた。七時過ぎに鈴木さんがチェックインし、以降は行動をともしした」

「は、はい！　そうです」　風船が破裂したように甲高い返事をして、八千谷はぶんぶんと首肯する。となりで聞いていた登藤が、やっとか、と鼻を鳴らしてペンをすべらせる。

「お部屋は確か『天津風』でしたね。一番端の」

佐川は簡易的に書いた二階の図面に目を落として言った。

「え、ええ」

「鈴木さんの部屋では過ごさなかったんですね」

「はい。『天津風』はここで唯一ダブルルームですから」

ダブルベッドでしっぽりと、か。佐川は眉間のシワを揉んだ。

「食後、忘れ物を取りに戻ったそうですね。時間にして五分ほど」

「そんなにかかっています。部屋を出たのがたしか二十五分だったから」

「おっとお、認めるんやな？」　登藤が八千谷の肩を叩き、ぐいと向き直らせる。

「そ、そう言っているじゃないですか」

八千谷はすっかり萎縮してしまった。

「食堂におった秋山がの、お前が忘れ物を取りに来てない言うとする。どういうことや」

また知らない情報を。佐川は迷惑そうに登藤を見つめることしかできない。「どういうことや」は彼の言いたい台詞であった。

「それは」

八千谷はこの世の終わりのように青ざめて肩を震わせる。

「どうもこうもあるかい。お前が嘘ついとるっちゅうことや。お前が殺したんちゃうか」

「俺は殺してません。誓います」

「なら何しとったか、白状せんかい」

登藤の付け焼き刃の関西弁が功を奏したのか、八千谷はさっさと吐き出してしまおうとばかりに早口で供述し始めた。

「まず、寧が緑茶を飲みたいと言いました。部屋にあるじゃないですか、アメニティのティーバッグが。でも全て俺が飲んでしまっていて、だから彼女は自分の予約した『唐紅』から取ってくると出ていきました。帰ってきた彼女は顔色が悪くて、ティーバッグも持っていないかった。俺は忘れ物をしたと嘘をついて『唐紅』を見に行きました。そうしたら」

「そうしたら？」　佐川は息を呑んで先を促す。

「し、死体があつて……傍らに血文字のカタカナで『ネイ』と書いてあつたんです」

「な、なんやて！」

登藤がこれみよがしに驚く。佐川はいい加減この後輩が煩わしくなってきた。この場にガムテープがあれば、彼の口を塞いで、ついでにペンを握らせた右手をぐるぐる巻きに固定してしまいたい。

「ええと、それで、あなたはどうしたんですか」

「寧がやったはずはないと思いました。でも、からだは勝手に……」

「具体的にはなにを」

「彼女がやったと思われるのはまずいから、扉にかかっている札を、隣の『宇治山』と入れ替えました。それから『ネイ』を書き足して漢字の『祐』に。最後に寧の指紋があつた

らまずいと思って、ナイフの柄からドアノブまでハンカチで拭き取りました。ほかの客がすぐ気がつくように、ナイフをドアにはさんで」

狼藉行為もここまでくればいっそ清々しい、と佐川は思った。恋人への愛ゆえとはいえ、ここまで無鉄砲に現場を荒らされたのでは、警察としてもお手上げである。

「あのう、俺は罪に問われますよね？」八千谷は自明のことをわざわざ訊く。

「せやな。まあ証拠隠滅は長くても三年やさかい、安心せえ」

ナイフの指紋を拭き取ったとすると、清水はその後の事件発覚と同時にナイフに触れたことになる。これにより、佐川の中で清水犯人説は消滅した。例外は、再び現場にやってきてナイフに触れた場合だが、これは考えにくいだろうと。

「もう一度鈴木を呼ぶぞ。それで片がつく」

「その必要はありません」

うら若い声がロビーにこだました。佐川が振り向くと、鈴木と秋山が立っていた。秋山は彼女の背中を押すように頷きかける。

「茂、どうして改竄なんて。これじゃ、あなたまで罪をつぐなわないといけない」

鈴木は美しい顔を悲哀に歪ませ、恋人に問うた。

「君こそ、どうして殺人なんか」

「私は罰を受けないといけないから。どんなかたちでも」

泣き出す彼女に八千谷は駆け寄り、肩を抱いた。ふたりだけの世界観が生成され、刑事たちは呆然とそれを眺める。

「邪魔をして申し訳ないですが、先に説明していただけますか」

蚊帳の外に追いやられていた佐川は、破って侵入するように口火を切る。

「すべてお話しします。あれは十二年前」

「なんや、そこから始まるんかいな」登藤がぼりぼりと頭を掻いた。

ことのあらましはこうである。

当時大学四年生だった鈴木は、教育実習でとある高校を訪れた。彼女は殊授業内での指導に抜きん出たものがあつた一方、生徒たちと仲を深めクラスをまとめる対人能力、つまり教育者としての求心力が欠落していた。自分は教師に向いていないと苦悩していたとき、生徒だった八千谷だけが彼女の葛藤を察知し、寄り添ってくれた。八千谷は当時から臆病だった一方で精神的に大人びており、鈴木は同年代のように溜め込んだ煩惱を披瀝することができた。

そして過ちが起きてしまう。鈴木は八千谷と関係を持った挙げ句、身ごもってしまったのだ。未成年淫行が発覚すれば教職を追われるに相違なく、しかし愛する人との子を棄てることなど到底できない。彼女はすべてをひた隠しにし、シングルマザーとして娘を育てていくことに決めた。八千谷とは、父親であると露見しないよう、娘の目を盗んで逢引を行っていた。

秘密というものは、持つことで有利になると捉える人がいれば、不利になると考える人もいる。鈴木の場合、それが決して抜けることのない罪の楔であった。隠しても仕方がない、だが向き合うことは恐ろしくて到底できない。いつしか彼女は、自分は裁かれないといけない、という強迫観念にとらわれていったのである。

「僕は何を見せられているんです？」登藤が関西弁を忘れて吐露した。
「言うな。俺も全く同感なんだ」

鈴木がよよと流す涙を八千谷がハンカチで拭う。彼女たちの関係は欠点を補い合うようだ。呪うべきは、ふたりの出会う時機だった、と佐川は遠い目で思う。

「そして『唐紅』に訪れた折、死体を発見しました。私は、それが罪を償う機会であると、運命的に直感しました。ダイイングメッセージに細工し、『ネイ』と書けばきっと私が疑われる。そう思っていたのに」鈴木が恋人の瞳を憐れんで見つめる。

「君のいない世界なんて、俺には耐えられない。ひとりにはしない」

「茂、ほんとうに、馬鹿」

ふたりの距離が縮まる。うっとりとした顔を閉じ、唇が触れるか触れないかまで近づく。

「はい、ありがとうございます。続きは署で聞かせてくださいね」

登藤が手を差し込んで遮った。両側からぶちゅつと唇が当たる。

「鈴木さん、最後に確認なんですが」佐川はダイイングメッセージを撮影した写真を取り出す。「八千谷さんは『ネイ』を『祐』に変えた。鈴木さんのとき、血文字はどんな状態でしたか？」

「『スイ』と書いてありました。間違いなく」

■石田

氾濫する流水は、元々枯れた川だったようで、下流へ降りると古橋があった。橋はコンクリートの打放しで、崩落の恐れはない。ただ、柵も設けられていないのは頼りなく感じられた。

そうして下流に回った石田たち四人は、川辺に寝転がる園田を目指した。幸い、彼は向こう岸から眺めた時と同じ地点にいたため、発見に手こずることはなかった。

「圭斗！」山路と小林が駆け寄る。

石田から見ても園田は明らかに弱りきっていた。瞼がだらしなく垂れ下がって呼吸も浅い。なにより、寒いはずなのに震えひとつ立てていないのだ。

「どいてくれ」寺尾は割って入ると、淡々と園田の首筋から脈を取る。「ちよっとまづいな」

「どういことですか」小林が慄然と訊く。

「低体温症だ、それもかなり進行している」

寺尾は冬のアウトドアに凝っていて、危険性についても見識が広いそうだ。低体温症についてよく知っているのはそのためだとか。曰く、軽度であれば震えや動作の鈍化程度で済むものの、進行するにつれて震えが止まり、頻脈や意識障害といった危険な症状が顕れる。重度に達すると昏睡し、脈が徐々に弱まって死に至る。雪山の遭難者が「寝たら死ぬぞ」と仲間を揺らすのはこのためだ。

園田の場合は、意識障害に言語障害、震えも止まっていて中等度まで悪化している。ひとりで歩くことも困難なようで、同級生の肩を借りてようやく立ち上がった。

「その合羽、貸してくれ」

寺尾は石田の羽織っていたビニール製の透明なレインコートを指す。

「な、なんで」石田は焦慮して寺尾の意図を探った。

「こいつを見殺しにするつもりか。今更自分だけ濡れたくないなんて言うなよ」

園田の救命を天秤にかけられ、石田も拒んでいるわけにはいかない。渋々レインコートを渡すと、あつという間に風雨が襲いかかり、石田は身震いした。

「すまない。折れてくれてありがとう」寺尾は面目なく言う。

「もういいよ、気にしてない」石田は腕を組んで鼻をすすった。本当は寒くて仕方がない。空き缶がその場にあれば、蹴っ飛ばしてやりたいところだ。

園田がレインコートを被る。これさえあれば、ひとまず下山まで症状が悪化することはないだろう。

「それで、どうする」石田は寺尾に問うた。「追跡を諦めるか？」

急病人がいるのだ、犯人を追っている場合ではない。石田は今一度、彼の意志を確認する必要がある。

「戻った方がいいですよ」

「そうだ、下山しましょう」

学生たちが口々に言う。石田は一顧だにせず、じつと寺尾の返事を待った。

「どうすればいいと思う」

寺尾の応答があまりに予想外で、石田は「何を言ってるんだ」と戸惑いを露わにした。彼なら迷わずノーと首を振って、追跡を再開すると思ったのに。

「わからないんだ」

寺尾は雨に濡れた前髪をかく。

「俺は、犯人を捕まえて塩谷さんの恨みを晴らしたいはずなんだ。でも、あいつは川で流されそうになった時、園田を助けた」

「そうは見えなかったけど」石田が茶々を入れる。

「勘違いでも関係ない。それを目の当たりにして俺は、やつの善性みたいなものを感じて……心のどこかで、赦してしまった」

「じゃあ諦めるっていうのか」

石田は神妙に応える。人に喋りながら答にあぐねる者は、大抵は心中で既に答えを出している。だから後押しや言語化の手伝いをしてやれば、あとは勝手に動き出す。最初の一步を与えることは、石田にとって造作もない。

寺尾は黙然と顔をしかめる。感情の入り乱れる様が表情から読み取れた。そして

「いいや、追跡は続ける。ひっ捕らえて、なんで殺人なんてしたのか聞いたです。気に入らなかつたらぶん殴る」

「そうかい」

石田は安心して彼の肩を小突く。

「気に入ったらハグでもしてあげなよ」

冗談のつもりだったが、寺尾は首肯した。そして覚悟の決まった目つきで山頂を睨む。

「この辺りは山脈が連なっていて、峰を繋ぐハイキングコースが整備されている。やつは土地勘がないだろうから、歩きやすい登山道を使おうとするはずだ」

「決まりだな」石田は掌を拳で叩いた。

「馬鹿げてる」

決意を新たにしたふたりとは対照的に、山路は疲弊した冷笑を浴びせる。

「圭斗を連れて帰ればいいでしょう。犯人逮捕なんて、警察に任せればいいことじゃないですか」

彼の言い分は正しい。石田も全面的に同意する。だが一見して無駄なことでも、寺尾にとっては気持ちを割り切るために必要なのだ。

大学生を見送ると、石田たちは森のざわめきに包まれた。いずれ警察も清水を追ってここに来る。それより先に彼に接触しなくてはならない。あまり時間は残されていないのだ。

■佐川

「ご協力感謝します」

ラウンジの端で眺めていた秋山に、佐川は話しかけた。

「いえ、捜査に協力するのは当然です」秋山は泰然として髪をかいた。

「悲哀でしたな、罪とわかっていて恋人を庇うだなんて。科学調査が入れば、ダイイングメッセージの書き足しなど簡単に見破られるというのに」

佐川から見ても、八千谷の自己犠牲は異常に映った。彼には、人に尽くして自己肯定感を満たそうとする、メサイアコンプレックスの気があるのではないか。聴取の際、あっさり自分の仕事を認めてしまったのも、彼女を救おうとした事実を知ってほしかっただけではないかと思われた。

ふたりのいびつな関係は、鈴木 of 聴取からも洞察できた。彼女を母親として褒めた時、毎回返答が遅れたのである。鈴木寧は三十四歳、娘は小学六年生で十二歳、「授かり婚」という単語を想像せずにはいられない。そして佐川はなんとなく、しかしほぼ確信的に「生徒にみだらな行為に及んだ教師」という構図を推測していた。

「わかっていたなら、直接聞けば早かったのに」

秋山の言う通りだ。反論の余地はない。彼女は正しいことを言っている。

「ちよっと身の上話を聞いてくれませんか。私、こう見えても教師を目指していた頃がありました」

佐川は高校時代の洗礼者について熱心に説いた。秋山はなぜそんな身の上話を聞かされるのか理解できず戸惑っていた。

「なぜ私が教師にならなかつたのかといえば、適正の問題です」

「よくある話ですね」

「よくあるということ、芯を食った理論だと私には思える」佐川はもったいぶって尊大な態度を取った。「恩師は、僕が卒業した後、校長になったんですよ。すごいですよ。一番名誉ある職業だ」

しかし、乾いた笑いをこぼした。「でも、捕まりました。未成年とわいせつな行為をして、その様子を撮影していたんです。相当お盛んだったみたいで、以前から風俗店に足繁く通っていたことも発覚しました」

だから、鈴木も恩師と同じではないか、と疑念を持ったのだ。秋山はどう返事したよいか分からない様子で、「そうですか」と渋顔で相槌を打った。

「我田引水かもしれないませんが、印象と適正は真逆の関係にあります。鈴木寧は気丈夫だがひどく自罰的だったように、一見備えていそうな性格が欠けている。恩師も、能力はありましたが倫理観が欠けていた。」

つまり、教師然としていた当時の私はむしろ最も教師の適正がなかったんです。だから教職は諦めました」

「そうでしょうか」

秋山は冷ややかに反駁する。

「あなたの理論は、恩師への失望を適正にすり替えているだけじゃありませんか」

そのとき、ひとりの年配の鑑識員がラウンジにやって来た。ややとこちらを見つけると、急ぎ足で寄ってくる。

「失礼します。被害者の部屋にこれが」

鑑識はそう言うと言と写真を提示する。真っ白に膨れたポリ袋がポストンバッグに収められている。

「すごい量だな」

「メタンフェタミン、約二百グラムあります」

佐川は顔色を変えて感嘆した。覚せい剤一グラムあたりの末端価格は二十万円だという。あくまでもこの数字は平均であり、実際はピンからキリまで変動するわけだが、いざこれにせよ何百万という金が動いていたことになる。

「ほかの部屋はどうだ。客の所持品からなにか見つかったりしなかったか」

「目ぼしいものは何も」

「ご苦労」

鑑識に一言添えて写真を返す。

「大変なことになってきましたよ、まったく」

佐川は鷹揚に振り向いた。

「ッ」

思わず言葉を失う。秋山は、鑑識の持つ写真を食い入るように見つめ、忌々しげに齒噛みしている。鑑識が背を向けてその場を去るまで、威嚇するように表情を歪めていた。

「被害者が麻薬を買っていた、ということでしょうか」

秋山が陰のある顔で言った。

「どう、でしょうか」

佐川は腕を組んで顔をそらした。頭の中で無数のピースが繋がっていく。

「これは警察官としての経験則になりますが、麻薬を売ったり買ったりする輩は、『まともな職』には就きません。就いていられない、と云うほうが正確でしょう。まあ、素性については時間の問題ですから、今の段階であれこれ考えても仕方がない」

鈴木が隠し事をして返答が遅れたように、秋山も言葉に詰まった質問があった。思い出そうとしているのでなく、目を泳がせて対応を逡巡していたのだ。

なぜ通報で清水の逃走を伝えなかったのか。

なぜ告げ口をして捜査に介入してくるのか。

なぜ覚せい剤を憎そうに睨むのか。

「あなたは、清水を庇っているではありませんか」

佐川はおそるおそる指差す。

「秋山さん。内ポケットに何を入れているのです」

秋山は反射的に一步、佐川と距離を取った。どうしてそのことを、と言わんばかりに胸元を手で押さえる。その動作には、明らかに動揺が顕れていた。

「実は食堂を訪れた時、子機の充電台が目に残りました。あるのは、なぜか台座だけ。肝心の本体はどこに行ってしまったのだろうと考えていました」

「違います、これは」

佐川が手を差し出すと、彼女は鋭敏に反応して身構えた。よーいどん、と掛け声があれば、一目散に走り出すだろう。

「秋山翠華。任意同行を頼めるか？」

トゥルルルルと電話の呼び出し音が、彼女の胸元から鳴り響いた。それが合図となり、秋山は身を翻して駆け出した。出口側は佐川が塞いでいたため、階段を激しく駆け上がる。

佐川もすぐにその背中を追いかけた。

彼は言い聞かせる。

優しい警官はもう退勤した、もう猫を被る必要はない。何を隠しているのか知らないが、白状してもらおうぞ。

六時半頃、塩貝は清水の隣の部屋へ入った。つまり鈴木が予約した「唐紅」だ。秋山はそこで塩貝を殺し、七時の夕食に何食わぬ顔で出席したのだ。「唐紅」の客に死体を発見させ、罪を被せる算段だったに違いない。動機は、おそらく覚せい剤だろう。秋山の取引した薬物を塩貝が強奪し、それに腹を立てて凶行に及んだのだ。ダイイングメッセージの「スイ」は、翠華の書きかけなのだ。

なにが「失望を適正にすり替えている」だ。知ったような口を利きやがって。人には天から与えられた素質があり、否応なく向き不向きが決まる。俺だって本当は恩師のようになりたかった。だが、彼が捕まったときから、俺の羅針盤は狂ったままなのだ。

弟は警察を辞め、俺がなりたかった教職についた。中学校の先生だ。そのことで弟を恨んだことがある、妬んだことがある、意図的に連絡を無視したことだってある。だが、それと恩師とはなんの関係もない。

弟には適正があり、俺にはなかった。ただそれだけのことだ。そうに決まっている。

ふたりは階段を上がり、俺にはなかった。ただそれだけのことだ。そうに決まっている。

突き当りには屋根裏へ続く扉がある。彼女はそこに身を滑り込ませる。佐川がドアノブを掴もうとするタツチの差で、カチャと錠を下ろした。

「開ける、秋山！」

佐川はどんどん扉を叩く。殴った拍子にささくれが刺さるが、佐川はすっかり興奮していて痛みになく気づかない。扉の蝶番は黒く錆びて煤けており、力づくでも破壊して突破できそうだった。

■清水

側枝から垂れたツタに体重をかけ、清水は強度を測っていた。ここは足場が斜面から突き

出していて、山下を一望できる。ツタに腰かければアルプスの少女が如く、開放的なブランコを堪能できるだろう。もつとも、今回かけるのは腰ではなく、首なわけだが。

清水は確かめておきたかった。自分は死にたくないのかもしれない。ならば死の直前で踏みとどまるに違いない。川で流されそうになった時のように抵抗するはずだ。そうなれば、この仮説を信じられる。清水は確証を持ちたかった。

大丈夫、ちよつと足を伸ばせば届く高さだ。もし嫌だと思ったら簡単に抜け出せる。これは実験だ。問題はない。

そう考えても心臓は高まった。清水は一步前へ出ると、深く呼吸し、輪っかに首をかけた。ずしりと重みが伝わり、血流が押しとどめられる。清水は顔がかあつと熱くなったのを感じると、身体が軽くなった。

「あははっ」

どこかで笑い声が聞こえた気がする。清水は響きに懐かしさを覚え、ぼんやりとした意識の中を探った。高くて芯のある、女の声。

清水は運転席から後部座席を見つめていた。アリスが鼻をすすっている。青あざがあるのは、金井が客と揉めた彼女を躡けた痕だ。清水は記憶をさかのぼる。

アリスはぱつと破顔し、あの笑みを浮かべる。

「あははっ」

彼女はここに居てはいけない。このとき、そう心に深く刻まれたのだった。あのあと、雀の涙ほどの貯金を崩しアリスの借金に充てたのだ。もちろん彼女は拒んだけれど「贈与税は百万までかからないから」と、どこから仕入れたのか分からない理屈をこねて押し付けた。曖昧模糊とした追想をするうちに、なぜこんなことを思い出すのだろう、と清水は疑問を持つ。薄くぼやけた視界を認め、彼は臉を擦った。喉仏が痛い。とっさに手を添える。

清水は地べたに寝ていた。輪に体重をかけた途端、血圧が急激に低下して失神していたのだ。ツタが重みに耐えられずに千切れていなければ、彼は抵抗する間もなく死んでいた。

その事実を知り、彼は戦慄して肩を抱いた。自分は偶然生きている。死は抵抗できるものだと思っていた。だが、違った。死は突然襲いかかり、巨大な嵐のように一口で命を引きずり込む。頭の中で考える漠然とした概念とは比べ物にならない。もつと凶暴で、冷酷で、無慈悲なものだ。そんなものに軽い気持ちで縋ろうとしていた自分は、なんと浅はかだろう。「うわあああああ」

清水は恐怖にむせび泣いた。生きたい。たとえどんなに苦しくても、どんなにつらくても、死ぬのだけは嫌だ。俺は生きていきたいのだ。絶対に乗り越えてみせる。厳しい現実を受け止めて、生きてやる。

やっと体中に血が行き届き、清水は起き上がった。アドレナリンが急激に血中に混ざりだし、若干の吐き気を催す。もう迷いはない。スマホを取り出し、最後に着信のあった番号にかけた。

たのむ、出てくれ。コール音が何度もこだまする。この時間だけが永遠に続くのではないか、そう思えるほど長い長い時間が経った。

電子音が途切れ、「はあはあ」と息遣いが聞こえた。秋山に繋がったのだ。清水は焦燥で吃音気味に彼女の名を呼んだ。

「あ、あああ秋山さんですか」

「そう、ですよ。清水、さん」

言葉の間々に呼吸が挟まる。遠くでどんどんと叩くような音も鳴っている。向こうの状況が呑みこめず、清水は目を白黒させた。

「一体何があったんです」

「なんていうかなあ、タイミングが、悪かったんですよ。もちろん清水さんの、せいじゃないですよ」

そう言っただけ彼女はゴソゴソと物音を立てる。打撃音が遠のき、移動したのだと推測する。清水は、言いたいことを早く吐き出してしまおう、と意を決した。

「俺は、死んで楽になろうとしていた。殺人の罪から逃げるにはこれしかないんだって。ああ、今夜のことじゃありません。もつと前、三年くらい前のことなんだ。その時の俺はタクシードライバーで、酩酊した女を乗せていた。そいつと喧嘩になって突き飛ばしたら、彼女は縁石に頭をぶつけて……動かなくなつた。声をかけても、返事がなかったんだよ」

「ちよつと清水さん、それ本当ですか」

秋山は疑うような、それでいて期待するような調子で訊いた。

「本当だよ。で、その瞬間を崇史さんに見られていた。崇史さんというのは、なんというか、危ない会社の稼ぎ頭、みたいな人だよ」

「ヤクザとかですか」秋山はあつけらんかんと言う。わざと伏せた意味がなくなつてしまった。

「崇史さんは薬とか売春とか、いろんな商売をしていた。俺は口止めする代わりに彼の下で働かされていた」

「それは」

「でも悪いのは俺だ。春のことだ。崇史さんが目をかけていた嬢に俺は言い寄られた。でも俺は怖くて、彼女を拒絶したんだ。そうしたら、彼女は俺が無理やり襲つたと崇史さんに吹き込んで」

「清水さんは、その後どうしたんですか」

秋山がこわごわと質問してきたのは意外だった。清水はつまびらかに語った。

「逃げるしかなかった。崇史さんが『清水なんて奴は初めから存在しなかった』なんて口走つたから、何されるのかすぐに悟つたよ。警察を頼るわけにもいかないから、逃げて逃げて、今ここにいる」

「つらかったですか」

「そうかもしれないし、そうじゃないかもしれない。俺は罪を犯したんだ。でもまだ償ってない。償っている方が、きつとつらいはずだから」

「向き合おうですね、自分に」

「ああ」清水は短くつぶやいた。鼻腔の奥がジーンと熱くて、これ以上喋ると泣き出してしまいそうだ。

「君が俺に話しかけてくれたこと、うれしかった。感謝を伝えたかった。きつと、もう二度と会わないだろうから、最後に言わせてくれ」

「最後じゃないですよ」

清水が言いかけたとき、秋山がそれを遮った。彼は啞然と耳に神経を注ぐ。

「また会えたじゃないですか。だからきつと次があります」

清水は彼女の意味するところを理解しかねた。一体何の話をしているのだろうか。

「そんな、すでに会っているみたいな言い方」

「あははっ、そこまで出ているのに分からないんですか」

聞き覚えのある嬉声にはっとする。あの頃は仕事のために濃く化粧をしていた。すっぴんだから気づかなかったけれど、面影はそのままではないか。

「アリス？」

「あはははっ、面白い反応。そうですよ、元仕事仲間だとは思いませんでしたか」

「いつから気付いていたんだ」

「最初からです。清水さん、『初対面です』で通してくるものだから、私の経歴に気を使っているのかと勘違いしました」

秋山はひとしきり笑い終えると、生気の抜けた調子で訊いた。

「清水さん、これからどうするんです？」

「大人しく捕まるよ。実は寒くて、ひとりで下山するのも大変なんだ。自首もできやしない」

「そうですか。じゃあ私も大人しくお縄につきますかね」

「どういうこと」清水は驚愕して身をこわばらせる。

「清水さんが逃げるまで時間稼ぎができないか、色々やってみたんです。情報を隠したり、あえて告げ口したり。まあ、それが祟ってすっかり疑われちゃいました」

軽率にとんでもない行動をするなあ、と清水は冷や汗を拭いた。秋山の攪乱があったから、自分は罪に向き合う時間を得られたのだ。そう考えて改めて、彼女をそっけなくあしらってしまったことが慚愧に堪えなかった。

「冷たっ」

「どうしたの」

「私、屋根裏に立て籠っているんですけど、なぜか窓の周辺が水浸しなんですよ。ああ、葉っぱも落ちてる。誰かが閉め忘れてたんですね」

そこで、秋山は「うん？」と唸った。

「どうかしたの」

「どうでもいいことなんですけど、なんか気になっちゃって」

「なにが」

「もみじの葉がですよ、濡れているのと乾いているのが落ちています」

「つまり？」

「いつ閉めたのかなって」

ガタガタと揺らすような音が響いた。清水はスマホにぴったりくっついて耳を澄ます。

「何か聞こえない？」

「蝶番を外されちゃったみたいですね。知ってます？」

日本の扉って外開きだから、ハリウッド映画みたいに蹴破るのは簡単じゃないんですよ。もうちょっとかかると思ったんだけどなあ」

「アリ……秋山さん」

「翠華でいいですよ、しみけーさん」

余計なことまで覚えているな、と清水は苦笑する。

「清水さんも信じて委ねてください。警察だって馬鹿じゃありません」

「ああ、本当にありがとう。じゃあね、翠華さん」

扉が破られた音が聞こえ、通話は切られた。ざあざあという雨音がぶり返したように感じられる。

清水はぶるつと震えた。あたりは一層寒くなっている。

夜明けは近いのかもしれない。

■石田

山脈を横断するハイキングコースは風がひどく通る。天候は霧雨へと軟化したものの、あまりの寒さに勇んでいた石田と寺尾も音を上げた。

清水が逃亡を図るなら間違いないこの道を使うはずなのに。

寺尾は首を傾げて「雨宿りしているのかもしれない」と考えたのかもしれない。いずれにせよ石田は彼の提案をのみ、雨風を防げそうな場所を探した、

それからしばらくし、石田たちは木陰に腰を下ろした。根腐れした木が斜めに寄りかかり、背後はコケや落ち葉が積み集まって穴倉を形成している。風雨を封殺するこのつくりはホテルに匹敵するほどの快適さだ。

石田は、もし自分が熊だったなら迷わずここを住処にするな、と皮肉に笑った。

「寒いな」寺尾は鼻をすする。

「下山したいと言おうつもりか」石田はにやにやと訊いた。

「なわけないだろう」

「それを聞いて安心したぜ」

石田はククとほくそ笑む。寺尾はもの言いたげに彼を睥睨した。

「興奮しているのか」

「俺がか」

寺尾の質問に石田は一考し、虚空をながめた。うまいたとえが思いつかない。大抵の人は、スピーチだとか試合だとか、本番を前にすると緊張するものだ。心拍数が上昇し、瞳孔が開かれる。これは興奮していても同様の生理反応を催し、石田の場合、脳が緊張を興奮だと誤認して急激な躁状態を引き起こすのだ。

説明されてもピンとこないのか、寺尾は唸った。

「まあ理解してもらおうとは思ってねえよ」

石田は肘をつく。奇異の視線には慣れている。言うことをきかないこの脳も、結局は使えないのだ。石田は緊張であがってしまうということはない。重要な出来事は自分を大胆にしてくれる。それゆえ彼は自らを英雄的とまで評している。

「なにか聞こえなかったか」

ふいに寺尾が空を見上げる。「叫び？ いや、泣いているようにも」

「どっちの方角だ」

石田は腰を上げる。声の主が清水なら居所の手掛かりになる。

「たぶん、こっちだ」

寺尾は自信なさげに西を指す。石田はスマホのライトを揚げ、勇み足で進んだ。草を分けて、木立を抜ける。緩やかな傾斜をふたつ超えると、ふたりは足を止めた。

前方の山陰にぼんやりと明かりが浮かんでいる。

「日の出か」

寺尾はそう口にしたが、すぐに違うと知った。光は弱弱しく白っぽいのだ。自然光ではない。

石田はライトを落とし、息を潜ませた。寺尾も俯って腰をかがめる。距離にして約二百メートル、スニーキングするにはいささか遠い。

「俺に行かせてくれ」寺尾は石田の返答を待たず、そろそろと歩いていく。

仕方ない、と石田は苦笑して回り込むことにした。寺尾があのまま光源に向っていけば、清水を下から見上げる格好になるだろう。逃げる可能性を考慮し、石田は清水の退路を断とうというのだ。

■清水

夜明け前が最も暗く、最も寒い。清水は木の根に身をしまい込んだ。風は凪いでいた。小粒な雨雫が振っては葉にはじかれた。

早く、明けてくれ。清水は拝むように東の空を伺った。今は日の光が彼の希望だった。

ぱしゃんと落ち葉を踏み荒らす音が鳴る。清水はおもむろにそちらへ視線を投げた。

「見つけたぞ」

パツと光を浴びせられ、清水は目がくらむ。声の響きから寺尾だと察する。やっと見つけてもらえたようだ。清水は降参の意を示そうと、両手を上げた。

「どうした、もう逃げないのかクソ野郎」

寺尾は威嚇するように罵詈雑言を口にする。清水は疲労困憊で、言い返す気力すらもつたいなく感じた。彼はただ、じつと相手が近づくのを待った。

「質問がある」男が震える声で訊く。「なぜ塩谷さんを殺した」

清水は首を振る。殺してなどいない、断じて。

「とぼけるのかよ。じゃあ次は川でのことだ」

男は取り合わず続ける。

「なぜ園田を助けた」

清水は目を伏せた。明確な理由があつて助けたわけではない。あれは本能に近かった。これを説明しても信じてもらえないだろうが。

「なぜだ。なぜ助けた。なぜ塩谷さんは殺したんだよ」

寺尾の声音が乱れ、鼻をすする音が混じる。清水は逆光で見えなかったが、嗚咽から彼が泣いているのだと分かった。悲しみで挫けてしまっような心を、怒りで必死に抑え込んでいるのだと。

寺尾のすすり泣く姿に、清水も胸がじんと熱くなった。彼の愁傷に否応なく共感し、我が物のように苦しくなった。

「お……これは」

清水は上手く回らない舌をもごもごと動かし、蚊の鳴くような声で言った。

「俺は、殺してなんか、ない」

信じられないかもしれない。それでもいい。清水はこの男が哀れで仕方なかった。無性に彼の肩をさすってやりたかった。

「嘘をつくな。お前がやったんだ」

「違う、俺は」

清水が近づこうと踏み出すと、寺尾はさつと退いた。彼の手からスマホがこぼれ落ちる。ふたりの間を転がり、憎悪と疑惑に満ちた男の顔を、暗闇から露わにした。

信じられない。当たり前だ。血の付いたナイフを握って「俺は犯人じゃない」なんて、清水本人も疑う状況だろう。それでも、清水は目の前の青ざめた男に向き合うという真摯さを抱いていく。

「警察に連行すればいい」

清水は両手を空に上げたまま、ゆっくりと男に迫る。

「それでもいい。俺はやってないんだ」

「く、来るな。何なんだお前」

寺尾は委縮して尻もちをつく。背後は休憩が屹立しており、あと一步でも後ずさりすれば頭から真っ逆さまだ。

清水は大股で立ち、寺尾を見下ろす。散々追いかけて恐ろしかったが、彼も自分と同じ、ちっぽけな人間なのだと感じとる。彼を刺激しないように、できるだけゆっくりと手を差し伸べる。

寺尾の目は、手と清水とを何度も行き来し、疑いの色を強めていった。

「信じられん」

口を開く。

「信じられるか、お前など」

彼は悔しそうに歯噛みする。

そして清水の言動を洗い直すように、眉間に深いしわを作った。

「信じない。お前に何があったのか、きっちり説明してもらうまではな」

寺尾は清水の手を借りて立ち上がる。そして力強く抱擁した。

清水もそれに応える。久しぶりに触れる人肌はじんわりと温かい。

互いを認め合うふたりを、朝陽が照らし出した。

そのとき、清水の背中がどんと押される。彼は何が起きたのか、全く分からなかった。抱き合う寺尾ともども、つんのめって崖に放り出される。

「はいお疲れ」

あざ笑うような声を耳にする。その性質に清水は聞き覚えがある。彼奴が押したのか。奈落に吸い込まれる一瞬に悟る。

寺尾の表情が視界に映る。死を目前に絶望と恐怖に歪み、救いを哀訴する。きっと自分もこんな顔になっているのだろう、と清水は思った。

このまま落下するのか。清水が悲嘆した時、彼の体は重量に反してふわりと浮き上がった。同じく重力に引かれる男が、とっさの判断で押し返したのだ。

「ああっ」

清水は体幹を駆使して何とか姿勢を持ち直す。反対に、寺尾は自らをささげる様に落下していく。

清水は急いで崖下を覗いた。ちらりと視界に収めたのは、岩に体を打って四肢を力なく投げ出す後ろ姿だった。寺尾は奈落の闇に消えた。しばらくガサガサと枝葉を揺らし、それも遠のくと、山麓は再び静まりかえった。

再び手が突き出される。今度こそ清水の息の根を止めようと悪意をまとって。

清水は動物的に危険な気配を察知し、その腕につかみかかった。組み合っていれば、道ずれになることを危惧して迂闊に動けなくなるだろうと踏んでのことだった。

「な、なんで」

清水は、寺尾を突き落とした石田に問うた。問わずにはいられなかった。

石田は口端が裂けたように歯を剥く。

「寺尾はあんたと揉み合った結果、不幸にも足を滑らせて死んだ。そういう筋書きなんだ。あんたもそうなる」

清水が狐につままれたように呑み込めずにいると

「まだ分からないのか」

石田は興奮した様子で気味悪く嘲笑する。

「塩谷って女を殺したのは俺だよ。邪魔してきたから、ついやっちゃまったんだ」

こいつが犯人なのか。

清水はさあっと血の気が引いた。石田は人の死をなんとも思わないのだ。寺尾が滑落したというのに、罪の意識とか良心の呵責だとか、そういった後ろめたさを微塵も感じてはいない。

必然的に石田の言葉は真実味を帯びた。清水は彼が犯人であるとすぐに得心していた。

「我ながらついてなかった」

石田は、清水と取っ組み合いを演じながら語る。

「あの女、俺が買ったブツをどこかに隠しやがった。高い金払ってこの仕打ちは酷いぜ」

清水は彼の話す内容がなにひとつ理解できなかった。眼前の存在が、おぞましい獣に思えてくる。

「どうして、そこまで自己中心的に、残酷になれるんだ」

「俺のどこが自己中心だって？ あの女は俺の物を奪った。寺尾もそうだ、俺の車をおしやかにした。すっげえ高いんだぜ。死んで当然だよ。それともあれか、あんたは決してやり返さない聖人様なのか。殴られたらもう片方の頬も差し出すのか」

清水は反論に窮した。彼の脳裏に、乗客に反撃して殺めてしまった瞬間が蘇る。あのときやり返さなければ、と何度後悔したことだろう。

秋山を拒絶し、傷つけたことも清水が自己中心的だと暗に示している。自分はこんな奴と同類なのか。

「それでも」

清水は叫び、ここ一番の底力で踏ん張りをきかせる。

「はやく落ちやがれ、この」

石田も負けじと食らいつく。命を懸けた競り合いは息をつく暇もない。違う、俺は違う。

清水は強く言い聞かせる。

俺が石田と同じだというなら、なぜ園田を助けた。なぜ今さら罪に向き合い、自首する道を選ぶ。罪を背負うことが当たり前だというなら、もっと利己的なやり方もあったはずだ。

理由は明瞭。後悔しているからだ。自分自身に向き合おうとするからだ。

それでも前に進みたいからだ。

平気で他人を傷つけるお前と一緒にいるはずがない。

「良いね、逆に俺を落としてやろうって気迫。同じ穴のムジナ同士、仲良く殺し合おう」

石田は息を切らしながら上機嫌に喚き散らした。

石田は清水を見誤った。彼は石田を投げ落とせる体力など残っていない。する気もなかった。姿勢を倒し、押し出しに堪えることが精いっぱいだ。清水にこれ以上、抵抗する手立てはない。

だが、彼は諦めていなかった。体力が尽きる前に、すでに手は打っていた。

「ん？」

石田はふいに顔を上げて周囲を窺った。彼も気付いたようだ。

清水はぐくりと溜飲を下げた。石田に感づかれたことにも焦ったが、ようやく到着するという安堵の方が強かった。

「何なんだ、この音は」

当惑した様子で犯人は西の空を見た。干した布団を叩いたような、軽快な破裂音が小刻みに連続して響いてくる。

やがて、曙光を浴びて純白に輝くヘリコプターが姿を現した。

山梨県において年間の山岳遭難件数は約一五〇件、うち重度の負傷や低体温症などが原因で自力による下山が困難な場合のみ、警察や消防のヘリコプターが派遣される。秋山のスマホで助けを求めた清水は、「必ずしもヘリが来るわけではない」という文言に不安を覚えたが、こうして迎えが来て、ようやく胸をなでおろした。

「くそ、こんな……ふざけんな」

石田は余裕を失って地団太を踏んだ。単独で逃走を図る清水が、この期に及んで警察を頼るといふのは、石田には予想外の行動だったろう。清水の抹消に失敗し、みすみす犯行を自供してしまっている。それに上空から監視されている以上、この場で清水を突き落とせば言い訳が立たない。

そう考えているだろう。清水は石田の思考をありありと感じ取っていた。

そして逃がすまいと、最後の力を振り絞った。

「邪魔だ、この」

「絶対に放すか」

台風のようなダウンウオッシュが吹きすさび、周囲の木々が乱れ狂う。ヘリコプターが清水たちの頭上で滞空すると、救助隊員がケーブルに吊られてゆっくりと降下してくる。

「いい加減に」

石田は清水の拘束をふりほどき、重いフックを彼の脇腹にたたきこむ。

清水はうめき声を上げてその場に伏せた。にぶい痛みが全身からじわっと汗が噴き出す。プロペラの轟音に紛れ、足音がどんどん遠ざかっていく。

逃がしちゃいけない。ここでつかまえるんだ。そう思っても体は言うことをきかない。疲労が祟ったのか、一度離しかけた意識はあつという間に霧散していく。

「ここ……で」

まぶたが持ち上がらない。清水の意識はここまだった。

■エピソード

暗く冷たい秋は去った。

あれから四か月が経過し、清水の時間はゆっくりと動き始めていた。

「2594番！」

「2594番」

清水は元氣よく復唱した。忘れないように頭の中でも。

事件後、清水は自らの体験を洗いざらい供述した。石田が犯人であること、過去に自身も殺人を犯し、裏の世界で暮らしていたこと。予想外だったのは「嫌疑を外れたから」とあっさり釈放されてしまったことだ。

清水が押し倒した女性は生きていたのだ。清水と揉み合って一時的に失神し、数日後、本社に乗り込んでクレームを入れていた。訴訟にまで発展したが、現在は取り下げられている。

金井崇史が嘘を吹き込んでいたのだと知った清水は欣喜雀躍し、そして泣いた。彼に対する怒りも当然あったが、自分は罪に問われないのだという安心が勝った。

「絶対に忘れちゃだめだよ」

そう言って秋山がチラシを見せつけた。一面には「開店セール」の文字。

「もう大丈夫。ただか四桁のクーポンコードを忘れたりしないよ」

釈放された清水は、住む家はおろか、飢えに頭を悩ませる始末だった。見かねた秋山の伶俐に甘え、今はこうして居候をしている。

清水はハンドバッグをひったくり、アパートの一室を後にした。

ひゅうと風がうなじをなでる。身を縮ませ、ジャケットのファスナーを首まで上げた。

凍えれば、否応なくあの事件のことを想起する。あんな体験はもうこりこりだ。

目的のスーパーは、大型店で品揃えはもちろん、チラシによれば値段も遜色なし、いや一回り安い値段で売り出している。今回はさらに開店セールも重なるわけだから、近隣住民としては逃す手はない。惜しむらくは、アパートから駅をはさんで反対側に位置し、徒歩なら片道約二十分もかかってしまうことだ。

自転車でもあれば便利なのだろうけど、と考えて清水は指を鳴らした。

秋山に自転車をプレゼントするのはどうだろう。移動になにかと便利だろうし、安っぽくとも確かに生活の補助ができる。

夕飯を食らうだけの清水は、日々少しでも恩を返したいと思いを募らせていた。最初は感謝を伝えられればそれでいいと考えていたが、共同生活を送るうち、清水の心を秋山が占める割合が高まっていった。伝えたいのは感謝だけではない。もつとその先の、彼の内面に迫るものだ。

とはいえ、購入資金が清水にあるはずもない。このまま支えてもらうだけでは駄目だ。収入もないのでは話にならない。

清水は就職のことを考えながら横断歩道を渡った。

駅前ロータリーに続く幅広の歩道、その途中に路地へ入る曲がり角がある。

その暗がりには馴染むように人が佇んでいる。土色のフードを目深にかぶり、歩道の方をじつとうかがっている。

誰だろう。知り合いだろうか。

清水が考えていると、その人物が睨んだような気がした。

「あっ」

間抜けな声が上がった。

清水が振り向くと、トレンチコートに身を包んだ大柄な男が目丸くして立っていた。

清水はこの男に見覚えがない。切り立つ鼻梁は骨太な印象だ。一方で、柔和な口角からそこはかとなし穏健さも感じ取れた。

「清水さんですね、清水慶次郎さん」

「え、あの、俺は」

男性は胸元から折り畳み式の財布のようなものを抜き出した。それが警察手帳だと認識するまで数秒かかった。

佐川と名乗るこの男は、ペンションふおへんで起きた殺人事件を担当した刑事らしかった。

「奇遇ですね。仕事の合間にこんな場所でお会いできるとは思いませんでした。あれから捜査はぐっと進展していますよ」

清水は身がこわばった。あれ以来、彼の耳に事件の情報は届いていない。石田の行方が知れず、しばらくは復讐にやってくるのではと怯えて、毎朝新聞を確認していた。テレビやネットを駆けずり回って調べても、石田が逮捕されたという記事は見つからない。

そうして四か月も過ぎたことで、次第に記事にもならない程度の事件だったのだ、と考えるようになっていた。

「ちょっと待ってください」

清水は震える手で額を押さえる。

「捜査は進展しているんですか。解決ではなく」

彼の指摘は単なる佐川の言葉尻をとらえたようだったが、黒めいた予感を伴っていた。事件はまだ終わっていない。清水が狼狽するには十分だった。

「おっしゃる通り、捜査は現在も進行中です」

「石田は……犯人はまだ捕まっていないんですか」

清水が怖気づくと、佐川は落ち着いた調子で被りを振った。

「そういうわけでは。容疑者は無事発見されました。それについてはご安心ください」

なんだ、と清水は膝に手をつく。彼の頭の中で、すぐに適当な理由が組み上がった。事実関係を全て明かにするのに時間がかかっているだけだったのだろう。

「ところで、清水さん。少しお時間を頂戴できますか」

「それは」

清水は外出の目的を手短かに説明した。今は買い物頼まれているのだ。途中でほっぴり出すわけにはいかない。

だがそれも建前だ。刑事の話に付き合えば、面倒なことが起こりそうな気がする。事件が終わっているというのなら、さっさと公表してしまえばよいはずだ。ひよっとして、また自分は疑いをかけられているのではないか。今こうして顔を合わせたのも、実はアパートからずっとつけられていたからではないのか。

清水の中でパラノイアのように疑念がわき上がり、ぐるぐるとぐるを巻いていた。佐川は一瞬閉口し、じっと清水と目を合わせる。

「――あなたは、ずいぶんと疑り深いのですね」

清水は心臓を掴まれたように感じた。猜疑心は表情に出さなかったはずだ。それでも見抜かれてしまったのは、刑事の勘としか表現しようがない。

「情報を聞き出したいならいざ知らず、あなたの信用を得るためだけに無駄話に興じるのは避けたい。こうして喋りかけているのも、必要だから、それだけです。自分本位で大変失礼なことは承知していますが」

「いえ、気にしていません。すぐ自分のことばかり考えてしまうのは俺も同じです」

「すみません。損な役回りはいつも後輩が担当してくれるもので。やつはこの上なく生意気ですが、私も醜い部分を代弁してくれるありがたい存在です。しかも妙に偏った知識を持っていて、たまに鋭く指摘するのです」

清水の頭にぼたりと冷たい感触が触れた。

「ん、降ってききましたね」

ふたりは空を見上げた。雲一つない薄色の青空からぱらぱらと雨が降りはじめた。

「しまったな、天気予報を見ておけばよかった」

清水は手で傘をつくる。あの日みたく、全身ずぶ濡れになるのは御免被りたい。

「ちようどいい。雨宿りも兼ねて」

佐川は通りの喫茶店を指す。

清水は、刑事との邂逅と示し合わせたように雨が降ってきたことから、なにか運命的な力が自分を連れて行こうとしているように感じた。干天の雨に導かれ、彼らは喫茶店へ場所を移した。

◇

平日だというのに空席はまばらだった。佐川は隅のボックス席を指定する。

「どこから話したのか。まずは事件から現在までを順序立てて説明しましょうか」

注文したコーヒーがテーブルに並んだ頃、佐川は口を開いた。

香ばしい香りが清水の鼻腔をくすぐる。彼は応えるよりまずカップに口をつけた。秋山は紅茶の方を好むため、口にする機会は滅多になかった。

「事件のことなら、俺はほとんど何も」

一応犯人が石田であることや、動機については本人の口から聞いている。だがその他一切のことは把握できていない。被害者の女がどんな人物なのか。石田はいつ、どうやって犯行に及んだのか。今の清水には分からないことが多い。刑事はストレスの多い仕事なのだろうか。

佐川はミルクとスティックシュガーを迷いなく注ぐ。刑事はストレスの多い仕事なのだろうか。

「疑問の一つ目は『被害者がどういう人物か』でしょう。彼女は塩貝柚子、ペンションの従業員です」

「それだけで石田に殺されるとは、到底思えません」

「おっしゃる通りです。事件から一夜明けた頃、彼女の詳しい素性も判明しました。彼女の前職は、組織犯罪対策部だったようです」

犯罪、対策？ つまり彼女は元警察官だったということだろうか。

「彼女は去年の四月に退職しています。直前まで国際捜査課と合同で、とある組織犯罪を追っていました。主犯となる人物の特定までこぎつけていたそうです」

「へえ、なんだかすごい人なんですね」

佐川はコーヒースプーンをすすって唇を潤してから言った。

「塩貝の自室を調べたところ、大量の覚せい剤が発見されました」

清水はドキリとして器に伸ばしかけた手を止めた。冷や汗がじわりと肌に浮いてくる。なぜ、薬物が話題に上がるのだろうか。

「まさか、元警察のひとがクスリに手を出していたと？」

「いいえ。清水さんはこう供述されましたね。『石田が彼女を手にかけてしたのは邪魔されたから』だと。もし取引上のトラブルが殺人の原因だったらこうは言いません。彼女は取引を妨害しようとしたのです」

「変じゃありませんか」

清水は汗を拭って訊いた。

「被害者の部屋に薬物があつたなら、妨害が成功した、ということになります。この場合、被害者が殺されるはずがない。そうですよね」

佐川はさほど困った様子もなく、ぼりぼりと頭を掻いた。

「我々も同じ疑問を持ちました。しかし、真相はあつけないものです。事件のあつた部屋を調べると、ベッド下の引き出しが清掃されていました。文字通り、ほこりひとつないきれいな状態です。当たり前だと思ってしまうでしょう。しかし、ほかの客室のベッド下収納は、掃除の手が行き届いていませんでした。あのペンションのご主人、あそこに収納があることをすっかり忘れていたそうなのです。では、誰が掃除したのでしょうか。念のため訊いておきますが、清水さんではありませんよね」

清水は勢いよく首を横に振る。

佐川はそうですか、とはにかんだ。

「関係者全員に訊いてみましたが、自分がやったという人は現れませんでした」

清水は脳内でペンションの人物たちにバツ印を付けていった。ほこりがないということは、つい最近掃除されたことを意味する。

すると、残るのは――

「石田、ですね」

「違います」

確信を抱いていた清水は肩を落とす。急に裏切られた気分だ。

「いいですか、掃除をする意味を考えてください」

「汚いから。汚いと使いたくなくなるから」

「つまり、その引き出しを使いたかった、ということですね」

「じゃあ、なにかを引き出しに入れたかった」

「あるいは、すでに入られていた」

佐川はうつむき加減に訴えかけてくる。

「あの、刑事さん。もったいぶられても困りますよ。俺の理解を待たずにさっさと答えを教えてください。別に学校の授業じゃないんですから」

佐川はたははと笑う。

「それもそうですね。我々の考えはこうです。ベッド下の収納には、あらかじめ覚せい剤が隠されていた。石田はそれを受け取りに来た購入者だった。かなりの量だったため勝手にバイヤーだと踏んでいましたが、とんだ勘違いでした。こう考えると状況に説明がついてきます。バイヤーが隠した商品を塩貝が発見し、それを回収した」

肝心なことが説明されていないぞ、清水は訝しんだ。

佐川は淡々と続ける。

「回収に成功した被害者がどうして殺されたのでしょうか。それは彼女の前職が関係している。おそらく被害者は、事件現場に潜伏していたのだと思われまます」

「それはまた、なぜ？」

「警察官をやめた彼女は悩んだでしょうね。目の前に違法薬物があるというのに、自分には捜査する権限がない。そこで彼女は、取引現場を直接押さえることを思いついたのでしよう。現行犯の場合、ある程度の私人逮捕が認められています」

佐川は、学生らが清水を拘束した件を例に挙げた。その後の追跡については私人逮捕の範疇を超えていると釘を刺しつつも、刑事訴訟法で認められている行為と説明した。

「彼女は、犯人が覚せい剤を手に入った瞬間に取り押さえようと考えた。しかし、もし失敗すれば受け渡しに成功してしまう。彼女はリスクを避けたかったはずで。そこで偽物を作ることにしたのです」

「偽物？」

清水はつい鸚鵡返していた。

「部屋の浴室に塩が散っていたのはご存じですか。事件当夜、オーナー夫人の伊藤潤子によると、その日に限って調味料が底をついてしまったそうです。あとで詳しく訊くと、その調味料とは塩のことでした。浴室の塩と消えた調味料。結びつけるのは容易ですね。被害者は塩を袋に詰めて偽の商品を用意しました。犯人は被害者を殺害し、まんまと偽物を手に入れたわけです」

しかし、と佐川は続ける。

「子どもがプレゼントを買ったら、期待を胸にすぐさま包装を剥いでしまうでしょう。また、大きな買い物したら、不備がないか不安に思っただけで確かめたくなるものですよね。犯人は期待と不安から、いち早く中身を確認しました」

「でも、それは偽物で」

清水はおそろおそろ口にする。

「ええ。覚せい剤といえは漠然と白い粉というイメージを持ちますが、実は全く違います。被害者が用意した偽物は、見る人が見れば即看破されてしまう代物でした。そして当然、犯人もすり替えに気付きます。想定外の殺人に商品のすり替え。犯人が焦ったことは想像に難くありません。とにかく偽物を処理しようとトイレに流したのです。このときの残骸が浴室の塩でした。犯人は足元に散らばった微量な塩を見逃してしまっただけです」

語り終えた佐川は満足そうに微笑んだ。乾いた唇を潤そうと、コーヒーをゴクリと口に含む。カップのちようど半分あたりまで減っていた。

清水は椅子の背にもたれかかった。自分がペンションで過ごしている間に、そんなことが起きていたとは夢にも思わなかった。

それに、石田が菓物の購入者だったことも意外だった。石田にクスリを売った人物がいるという事実が、食い込んだ小骨のようにちくちくと痛んだ。

◇

被害者の人柄と行動を説明し終えた佐川は、気を取り直して指を組んだ。

「疑問の二つ目は、いっとうやって殺されたか」

清水は石田が犯人だと分かっているが、すっきりと呑み込めないでいた。石田がペンションに来てから犯行に至るまで、あまりにも時間が限られている。一体いつ彼は被害者を殺害したのだろう。

佐川がピンと指を立てる。

「まずは状況を整理しましょう。被害者はクローゼットで血を流して倒れていました。死因は大動脈損傷による失血死。凶器のナイフが現場に残されていました。あなたの指紋が残っていたことは、ご自身がよくご存じでしょう」

清水はナイフを拾った瞬間を思い出す。黒くぬめつとした光沢が、今も網膜に焼き付いている。血のついている刃が、そのまま体内に抉りこんだのだと想像すると総毛立つ。

「被害者の傍らにはダイイングメッセージが残されていました」

「ダイイングメッセージ？」
清水にとって寝耳に水だった。あの時は慌てていて、現場の状況なんてほとんど知らないのだ。

「ええ、漢字で『裕』とありました」

佐川はナプキンを取り、ささっとペンを動かした。文字のバランスは整然としている。

清水は、この刑事が書道を嗜んでいると一目でわかった。

「被害者の死亡推定時刻は、事件発覚から余裕を持たせて六時から八時半と診断されました。ここから聞き込みで得た情報を頼りに絞り込んでいきます」

佐川はナプキンを裏返して横棒を引く。上部に時刻を描きこみ、簡易的なタイムラインをこしらえた。

「最後に彼女が目撃されたのは六時三十分頃。あなたと秋山さんが客室に入る彼女と会話を交わしました」

「会話というほどのものでもありませんでしたが」

佐川はタイムラインの下に長方形を刻み、横並びに六等分する。(17ページ参照)

「これはペンションの二階だと考えてください。『宇治山』は左から三ブロック目になります。被害者は清水さんの隣の部屋に入ったそうですね」

清水は首肯する。彼がベッドで横になった時、隣で物音が聞こえた。これは警察への聴取で伝えている。見取り図によれば、塩貝は「山風」か「唐紅」に入室したことになるだろう。

「六時半から八時半の間に彼女は殺された。その時間帯にアリバイのない関係者は、清水さん、八千谷さん、秋山さんの三人。ほかの方は複数人で行動していたか、ペンションに到着していませんでした」

「俺は七時半に食堂へ行きました。六時半からの一時間はアリバイがない」

「そうなりますね。同様に秋山さんは七時に食堂に現れるまでの三十分、八千谷さんは鈴木さんが七時にチェックインしてくるまでのアリバイがありません」

犯人は石田だとわかっている。けれど、こうも見事に候補から除外されていると不安が募る。

「ここで我々は新しい証言を得ました。清水さんより先に鈴木、八千谷両名が死体を発見していたのです。さらに現場に細工していたことも告白しました」

「細工ですか」

清水は神妙に言った。

「まず八千谷さんは夕食後——八時二十五分ごろです——『唐紅』を訪れて死体を発見しました。そして『ネイ』というダイニングメッセージを発見します。鈴木さんの関与を察した八千谷さんは『裕』に書き換えてしまいました。さらに、凶器のナイフから指紋をふき取り、『唐紅』と『宇治山』のプレートを交換したのです。被害者が清水さんの部屋に移動したのではなく、部屋自体が入れ替わっていたわけですね」

清水は驚愕し、パズルのピースがはまっていくような感覚に至った。あのときは扉が半分開いていることに注意を取られ、部屋の位置など全く気にならなかった。「宇治山」のプレートを見て、「間違いなく自分の部屋だ」と合点していた。

すると秋山は唐紅で死んだ、ということになる。

「さて、鈴木寧さんですが、八千谷さんより先に部屋に訪れました。我々は八時二十分ごろだと見えています。彼女は何を思ったか、ダイニングメッセージに書き加えて自分に罪を着せようとした」

「ええ？ なんのために」

「そのことは、彼女の名誉のために伏せましょう。とにかく彼女は細工を施した。鈴木さんの発見時、血文字は『スイ』と書かれていたそうです」

「スイ、秋山翠香」

「やはりそうなりますよね。私も同じように早合点してしまいました。なにより、彼女は清水さんと内通していましたからね」

秋山が塩貝を殺し、清水に濡れ衣を着せて逃亡を手引きする。清水にとってあまり想像したくない可能性だった。

「ん、あれ？」

清水は顎に手を当てて唸った。喫茶店の室温は変わらないはずなのに、空気が熱く湿ったように感じられた。

「ここまでアリバイを整理してきましたけど、犯人を絞り込めていませんよね。八千谷さんと鈴木さんが俺より先に死体を発見していたから、俺が食堂から戻ってきて殺害した可能性は消えましたけど。でも依然として、夕食前の空白のアリバイは俺たちを容疑者だと示している。そもそも、石田がずっと容疑から外されているのが解せません。ここからどうやって候補を絞り込もうというんですか？」

「ここで、秋山さんの発言が大きなヒントになりました」

佐川は苦笑したため息をついた。

秋山を疑ってかかったことが申し訳ないのだろう。

「ひとつは、屋根裏です。ペンション三階の屋根裏スペースは物置として使用されていません。秋はほとんど使うことはなく、鍵も開けたままにしていたそうです」

屋根裏といえば、秋山が籠城していた場所だ。施錠していなかったため逃げ込むことができたのだ。

「屋根裏には小さな窓が設けられています。北側の窓付近の床が濡れていたのです」

これも秋山から聞いたとおりの情報だ。

「床が濡れていたことと、今回の殺人に何の関係が？」

「ところで清水さん。あの日、雨が降っていましたね。降り始めた時刻を覚えていませんか？」

「雨ですか」

清水は眉間にしわを作った。

「八時、だったと思います。正確にはわかりませんが、ラジオでそう聞いた気がします」

佐川がふっと口元を緩める。

「そのとおりです。雨が降り出したのは午後八時でした。さて、ここで思い出して欲しいのは、ペンション周辺に山脈から吹き下りる北風の存在です。あの激しい風雨はあなたが一番よく知っているはず」

「まさか」

「屋根裏が濡れていたのは、雨が北風によって室内に吹き込んでいたからです。あの屋根裏には葉が何枚も散乱していて、一部は雨にぬれずに乾いていました。これは、窓が雨の降る以前から開いていたことを物語っています。そして、秋山さんが屋根裏に籠ったときには窓は閉められていた。つまり、雨が降り始める以前に誰かが窓を開け、降り出した八時以降に閉めた、ということになります」

「窓なら従業員の誰かが閉めたんじゃないですか」

佐川は静然と被りを振った。ペンションのスタッフたちは一階のキッチンに駆り出されていた。彼らがやったはずがない。宿泊客のなかに「自分がやった」と言う者も現れなかったという。

「ええと刑事さん、これはどういう意味になるんでしょう」

「ベッド下の収納と同様です。誰もやっていない以上、犯人がやったということになります。宿泊客の誰かが嘘をついているか、たまたま開け放たれていた窓から外部犯が侵入した可能性があります」

屋根裏の窓から侵入だと。そんなことが可能なのだろうか。

「ペンションの裏手には非常用の梯子が設置されています。屋根裏の窓が開いていたとなれば、第三者の侵入も可能です」

「ところで、あなたの部屋がなぜ『宇治山』と名付けられているか、ご存じですか」

突然別角度から質問が飛んできて清水は固まった。そんなこと知るはずがない。

「わが庵は 都のたつみ しかぞすむ 世をうぢ山と 人はいふなり

喜撰法師の句です。私の後輩は、ペンション二階の六つの客室が六歌仙の俳から命名されていることに気付きました。どうやらオーナーの趣味だそうです」

清水はああ、と声を漏らす。あの人懐っこそうなオーナーの顔が目には浮かんだ。

「私は『室名は六歌仙の順に並べられているのではないか』と考えました。しかし、後輩は肯定しつつもこう言った。『半分合っていて半分間違っている』と」

「当たらずとも遠からず、ですか」

「いいえ。彼はもっと直接表現したのです。六つのうち、三つが合っていて三つが間違っている、とね。」

札のすり替えは二度行われているのです」

清水はナプキンに描かれた二階の簡略図に目を落とした。八千谷が「宇治山」と「唐紅」を入れ替えたのだから、間違っているのはふたつである。つまり、あともう一枚がすり替えられている。

「残るは『天津風』『山風』『花色』『鏡山』の四部屋。相互に入れ替えていた場合、後輩は『四部屋が違う』と答えるところです。三部屋が間違っているのなら、『宇治山』か『唐紅』が二度入れ替えられた。ここまではすぐに理解できたでしょう。」

では、清水さん。なぜそんなことが行われたのか、理由はお分かりですね。

八千谷さんのように、事件のあった部屋を誤認させようとしたのです。

清水さんの証言から鑑みるに、被害者の入った『山風』か『唐紅』が本場の事件現場だということになります。鈴木さんは一度すり替えられた状態で『唐紅』で死体を見ている。必然的に、残る『山風』が真の事件現場だと断定できます」

事実を聞いて清水は毛が逆立つ思いだった。

「山風」は石田が泊まる予定の部屋だ。

「犯人は被害者を殺害して『山風』と『唐紅』を交換、次に八千谷さんが『唐紅』と『宇治山』を交換したのです。」

犯人は、七時半から八時二十五分の間にアリバイのない人物。そして三階の窓から外部犯が侵入した可能性も浮かんでいます。これにより、八時半にペンションにやってきた石田にも犯行が可能です。彼は七時五十分に電話をかけています。ペンションから四十分ほど離れた場所から発信したそうですが、自己申告ならいくらでも偽れる」

佐川は親指と人差し指を立てて見せた。

「ここで秋山さんの提示したふたつめの手がかりが役立ちました」

清水はいよいよこの推理も終わりに差し掛かったと悟った。

◇

「被害者はかなり出血して倒れていた。そうですね？」

清水は頷き、そして青ざめた。被害者を中心に広がる赤い海。グラスをひっくり返した程度の出血ではなかった。彼女は一体どれだけの血を流したのだろう。想像するだけで恐ろしかった。

「秋山さんはこう言いました。犯人は返り血を浴びているはずだと。清水さんは事件前後で同じ服を着ていた。着替えを持っていない。つまり返り血を浴びていないのだ。犯人じゃない、という具合に。まあ、彼女の本意は犯人を特定するのではなく、あなたの容疑を

晴らすことでしたが。彼女から聞いていませんか？ 秋山さんは我々に疑われながらも、一貫してあなたを庇おうとしていたのです」

清水は改めて人の口から聞かされて面はゆくなった。彼女が自分の身をなげうってまで助けてくれたことは感謝してもしきれない。同時に巻き込んでしまった負い目も感じている。彼の心境は悲喜こもごもであった。

「返り血の付いた服があれば犯人と断定できます。が、そんな決定的な証拠がすぐに見つかれば苦労はしません。関係者の部屋や持ち物から、それらしいものは発見できませんでした」

「そうでしょうね。もし俺が犯人の立場なら、洗い流すか、捨ててしまおうでしょうし」

そう口にして清水はおやと思った。洗ったところで乾燥が間に合わない。ペンションの客室にはドライヤーが設置されていないのだ。

「犯人は血まみれの服をどこかに捨てたんじゃないでしょうか」

「どこか、とはどこです」

清水は答に困った。屋根裏の窓から出入りできたのなら外に隠したに違いない。どこかと訊かれても答えられなかった。

「意地悪な質問をすまいません。あの日、雨が降ってきたのは午後八時です。宿泊客の皆さんは誰も傘は持っていなかった。車移動でしたから困らなかったでしょう。持っていないので当然です。傘がないのでは、外に出たときに濡れてしまいますね」

「それは、そうですね」

「ですが、宿泊客の荷物から濡れた服は見つかりませんでした。つまり誰も服を外に捨てに行っていないかもしれません。洗い流した可能性もゼロです。」

すると、そもそも犯人は血を浴びていないかもしれない」

「どういうことですか」

清水は寄りかかっていた背もたれから身をはがした。

血を浴びていないイコール犯人じゃないという理屈で清水は容疑を逃れた。

ひよっとして佐川はまだ自分を疑っているのか。冗談じゃない。

「落ち着いて聞いてください。重視しているのは、結果ではなく仮定です。」

先ほどまで清水さんは『血に濡れていない』という結果で犯人ではありませんでした。

そして今は、犯人と仮定する場合『血を浴びてしまう』ため犯人ではありません。

被害者を刺し、凶器を置いて去る。この一連の行動が可能な人物こそ犯人であるわけです」

清水は佐川の仮定に適する方法をシミュレートしてみる。

例えば、被害者と距離を保って攻撃できる凶器を使用する。ほうきの先にナイフを固定すればそれらしくなるだろう。

あるいは、あらかじめ自分の服に撥水スプレーを念入りに吹きかけていた。

もちろんこんな馬鹿馬鹿しい妄想はすぐに否定された。被害者の潜伏を知らない犯人に用意できたはずがない。

清水は腕を組んで唸った。服を汚さずに犯行に及ぶには計画的でなければならない。だが、塩貝は身を隠していたわけだから、殺人は偶然のはずである。

拭いきれない違和感が頭にこびりついていた。撥水という発想は正しいような気がするのに。

「あっ」

清水はハツとして顔を上げた。

「レインコート。レインコートですよ。石田が食堂にやってきたとき、雨に濡れたレインコートを脇に挟んでいました。やつはスポーツカーでペンションにやってきた。駐車場から入口までせいぜい十数メートル。そんな短い距離のためにわざわざレインコートを着たはずがない。あのレインコートは、窓から侵入する際に濡れないために準備していたんだ。それが結果的に返り血を防いだ」

興奮で清水の声調が強まる。そして我に返って赤面し、きよろきよろと周囲をうかがった。

「あなたのおっしゃる通り、レインコートこそ石田を犯人と断定する決定的証拠になりました。園田圭斗は警察に保護された際、石田のレインコートを羽織っていました。少しでも体温を保つために借りたのだと言っています。それを調べて私も驚きました。なにせ自分の反応がびっしりと現れたのですから。たとえ雨水で洗い流されても成分はしっかりと残っているのです」

ルミノール反応だ、と清水は目を輝かせた。ルミノール液は血液に反応する。一部の鉄化合物が触媒となって発光を強めるのである。

「まとめると、犯人はこのような流れで犯行に及んだでしょう。」

時刻は七時五十分、ペンションから少し離れた場所で車を止めて電話をかける。これによってオーナーに、彼がまだ遠くにいると印象付けました。

次にレインコートを着てペンションの裏手に回った。屋根裏の窓から侵入し、彼の予約していた『山風』に向います。わざわざ侵入したのは、犯人が被害者の存在に気付いていたため、と考えるとつじつまが合います。ペンションで待ち構える彼女の裏をかこうとしたのです。

犯人は客室に入りこむと、ベッド下の引き出しに手をかけます。その瞬間、クローゼットの中から被害者がとび出し、犯人に襲い掛かりました。彼はとっさに忍ばせていたナイフで反撃し、彼女を絶命させます。このときの返り血は雨避けに羽織っていたレインコートにより、奇跡的に防がれました。

予期せず殺人を犯してしまった犯人は、さらなる問題に直面します。受け取るはずの違法薬物が、ただの塩にすり替えられていたのです。

犯人は焦り、考えます。本物の商品は被害者がどこかに隠したに違いない。すると、取引と殺人を切り離せば、自分が動機の点で疑われることはないのではないか。あとは殺人をだれかになすりつければ大丈夫だと。

犯人は取引の存在を隠すため、塩をトイレに流して隠滅しました。このとき、わずかな塩が足元に散らばったことには気付きませんでした。

次にナイフから自分の指紋をふき取って捨てました。他人に罪を着せるには、その人物が殺人可能な状況を作っておく必要があります。だから凶器は現場に置いていかざるを得なかったのです。

最後に『山風』と『唐紅』のプレートを交換します。これで『唐紅』の宿泊者が死体を発見して通報してくれる、という算段です。あとは来た道を戻るだけ。これらの一連の犯行は、電話のあった七時五十分から鈴木さんが死体を発見する八時二十分の間に遂行されました。

犯人はこのまま立ち去れば良かったのですが、念のため宿泊客として戻ってきました。清水さんに罪を着せ、直接抹消することで事件を闇に葬ろうとした。

以上が、石田トオルの犯行のすべてです」

語り終えた佐川はコーヒートを最後まで煽った。

ソーサーの上に空になったカップが戻される。

元警察官の死は、これで語りつくされたのだった。

◇

「ここからが本題です」

佐川は襟を正して一層真剣な眼差しを清水に投げた。

「実は、捜査隊が山中をひっかきまわったのですが、石田のしつぽはなかなかつかめませんでした。彼は文字通り忽然と姿を消したのです。

そして、発見されたのはつい最近、ほんの二週間ほど前のことでした。場所は青木ヶ原樹海のご真ん中。深い森がずうっと広がっているようですが、ちよつとした泉があります。石田が逃亡した地点からはいぶ離れています」

佐川は言葉を選ぶように唾を飲んだ。

「彼は、亡くなっていました」

「え」

「ひも状のもので首を絞められた後、重石に結んで沈められていました。鑑識によると。死亡したのは発見からさらに二週間ほど前。つい一か月前まで彼は生きていたということです」

石田が殺されていた。そんな馬鹿な。

清水は何か言おうとしたものの、ぱくぱくと口を動かさばかりだった。彼にとって、まだ事件が終わっていないなど、到底受け入れられる事実ではない。

「泉からはさらにもう一人の死体が上がりました。身元は不明です。こちらは死後一年が経過してしまいました。死因も同じく絞殺です、首の骨が折れていました。

まったく、石田も恐ろしい事件に巻き込まれたものです。

我々は石田に関する情報が必要としています。本日は秋山さんにお話しをうかがおうとやってきたのですが、清水さんに会えるとは幸運でした。あなたの現在の住所も連絡先も知りませんかね」

「そうですか。俺は翠華さんのお宅に居候しているんです。彼女ならきつとすぐに話す時間を作ってくれるはずですよ」

佐川は驚いた様子で「これまた幸運だ」と髪を撫でつける。

清水は秋山の住所と電話番号を書いて渡した。

「いかがです。奴が恨まれるような理由は思いつきませんか」

清水は渋い顔を作って首を振った。濡れ衣を着せられたのだから清水こそ正当に恨む権利がある。

「逆に質問ですけど、刑事さんは誰がやったと考えているんですか」

「それは明かせません。清水さんや秋山さんじゃないことは確かです」

「――ずるいな」

「ずるくて結構です。警察が正直さで評価されるのなら、あなたは警官になるべきですよ。わたしはメンタリストにでも転職しましょう」

「なぜ、メンタリスト」

清水は小首をかしげた。

「人はそれぞれ生まれ持ったものがあるでしょう。それを発展させていく方が、建設的な人生を送れるからです。憧れや適正に惑わされず、巨視的に自分を積み上げていこうと、私は決めました」

ブウンと佐川の胸元から低音が鳴った。

「失礼、着信だ。私はしばらく席を外します。お急ぎでしたら会計はこれで済ませてください。お時間を作って頂きありがとうございます」

そう言って刑事は二千円をテーブルに置く。

「おつりはどうするんです」

「お気になさらず」

清水は早歩きで店を出ていく佐川を見送った。

喫茶店ならば通話のためにわざわざ退席しなくてもよいではないか。清水は疑問に思った。しかも、眼前の話し相手やさしおいて電話に応じるといのは奇妙に映った。

すると、よほど清水に聞かれたくない、かつ急を要する話だったのだろうか。清水は刑事の態度が腑に落ちず、もやもやとした胸中で事件を振り返った。

樹海で発見されたふたつの遺体。そのうち石田は重りを付けて沈められていた。単なる殺人ではない。発見されにくくする意図を含んだ遺棄である。

すぐに清水が想像したのはヤクザ映画だった。手を下すときは、遺体が発見されないようにコンクリートで固めて東京湾に沈める。人間の体は死んだ後に体内でガスが生成されて水面に浮かんでしまうのだ。だから、遺体を沈めるにも一工夫が必要なのである。

すると、ふたりを手にかけたのはヤクザだということか。清水はタカシに殺された経験から、この一見飛躍した仮説もすんなり受け入れることができた。

しかし、妙な点がある。

石田がヤクザによる犯行だとして、もうひとりが殺されたのはどういうわけだろう。

まず考えうるのは、石田が買い付けようとした違法薬物だろう。取引が警察によって暴かれて足がつくことを恐れたヤクザは、自らの手で石田を始末した。もうひとりも同じ理由で命を奪われたのかもしれない。

だとしても疑問は残る。

どうしてヤクザはわざわざあのペンションを取引場所に選んだのだろうか。どう考えてもあの場所であることに必然性は感じられない。

いや、逆に考えるのだ。覚えい剤を売りに来た人物は、どうしてもあのペンションを取引場所に使いたかった。そうする理由があったのだ。

そう仮定すると、犯人が取引を行うには条件があるのではないだろうか。時間と空間に制約がある。一定の場所からは離れられないのか。学校に通ったり、あるいは職場に勤めていたりするならば、この条件でも適合する。

「――落ち着けよ俺。犯人はヤクザなんだろう。だったら学校や職場は関係ないだろう」

頭はいたって冷静だった。矛盾しそうな事象は犯人を絞りこむフィルターとなる。犯人はヤクザではない。だが薬物を売りさばき、人も殺める恐ろしい人物だ。そいつに石田は抹消されたのだ。

「だから、なんだってんだ」

清水は二千円を握るとレジに向った。おつりはためらわず財布にしまいこんだ。佐川はいずれ秋山のアパートに来る。そのときに返却すればいい。

今の清水には日常がある。せつかく手に入れた平穏を、誰が手放すものか。

■佐川

突然電話をかけてきた登藤は「近くに來たので、あとは直接話します」と通話を切ってしまった。仕方なく佐川は喫茶店の軒下で待つことにした。

彼が到着したのは、それから五分ほど経った頃だった。たかが数分とはいえ二月の余寒は佐川を芯まで震え上がらせた。

「先輩、もっと暖かい格好しないと風邪ひきますよ」

「うるせえ。だったらこんなところで待たせるな」

「いやあ、すいません」

後輩は傘を閉じながら悪びれもせず言った。

雨風に吹かれない建物の狭間に佐川を誘導する。

「電話でも言いましたけど、こいつは驚くべき新情報です。こころして聞いてください。

あれは今から三十六万――」

「こんなときまでふざけるな。端的に頼む」

「はい。石田と一緒に沈んでいた遺体の身元がわかりました」

「……本当に重要な情報じゃないか」

佐川は一転して剣呑な雰囲気帯びた。

「金井崇史、五十五歳。元暴力団員。売人、ポン引き、淫売どもを束ねていて、あくどい稼ぎ方をしていたそうです。その世界じゃあ有名な人だったらしいですよ」

「殺されても文句は言えない稼業だったわけか」

「ええ。組内の勢力抗争で劣勢に回ると、しつぽを巻いて引っ込んだみたいです。ところが、逃げる時に仕入れていたヤクを全部頂いて遁走したそうなんです」

佐川はスマホの写真をスクロールして見る。

「遺留品に薬物らしきものはなかったな。趣味の悪い背広とセカンドバッグ、あとはライターに、半分残ったマールポロ」

「そうですね。動機は持ち出したヤクで間違いないでしょう。」

これは、あれみたいです。八つ墓村。たしか、落ち武者をかくまった村民たちが、彼らの黄金に目がくらんで襲い掛かったっていう」

「石田は落ちヤクザに崇られた、か。馬鹿馬鹿しいが発想は正解かもしれない」
「本当ですか」

登藤は目を輝かせる。

「泉から揚がったふたつの遺体、そのどちらの背景にも違法薬物が関わっている。しかし動機まで同じではなく、それぞれ違う時期に違う目的で殺されたと考えられるんだ。

例えば、こんなふうに仮定できる。

金井は八つ墓村で例えたように、金に誘惑されて犯行に及んだ。やつが持っていた覚せい剤がどの程度の量だったかはわからないが、犯人はその価値を知っている人物だ。

次に、石田は受け渡しに失敗し、購入した薬物を警察に押収されてしまった。彼はつい一か月前まで生きていて捜査の目をかいくぐっていた。おそらく、犯人がかくまっていたのだろう」

買い手である石田をかくまいたい人物など売り手以外に考えられない。また、薬物をベッド下に隠すことができた人物はペンションのスタッフと宿泊客である。ひよっとすると、すでに佐川が会った人物のなかに犯人がいたのかもしれない。

登藤がはい、と挙手する。

「なんだ」

「先輩、ここで焦っちゃだめですよ。犯人はなにも事件当夜にペンションにいなかったって良いんです。前日か、もっと前に泊まりに来ていて、ベッド下に商品を隠すだけでいい。簡単でしょう」

佐川は言下に駁する。

「いいや、そうでもない。警察はペンションでの事件をろくにマスコミに明かしていないんだ。犯人が石田をかくまうには、『警察に取引がバレた』と知っていることが絶対条件だ。それに、警察より早く石田に接触するには、彼の周辺にいる必要がある」

「だから、やっぱり関係者のなかに犯人はいる、というわけですか。でも一般人がヤクザを殺して薬物を奪い取るなんて、そんな野蛮な真似はしないでしよう」

「じゃあそいつは一般人じゃないのだろう。経緯は不明だが、覚せい剤の知見を持っている。ひよっとして暴力団関係者か」

佐川は逡巡すると、またスマホを繰った。関係者の写真をピックアップする。

「民泊経営者、主婦、大学生、会社員、無職。とても暴力団と関係があるとは思えん」

「案外、服をひん剥いたら龍の刺青がどーんと現れるのかも」

関係者のなかで暴力団とつながりのあった人物こそが犯人である。過去の経歴を徹底的に洗い直せば犯人が判明するかもしれない。

「現状わかったことはこんなところか。ひとまず捜査本部に戻って――」

「あっ」

そう声が聞こえた方を振り向くと、清水慶次郎が建物の陰から顔を出していた。佐川のスマホを食い入るように見つめて言葉失っている。

「おや清水さん、どうかしましたか」

登藤が怪訝そうに耳を打つ。

「なんで彼がここにいるんです？」

「偶然見かけたから俺が声をかけたんだ。あの秋山翠華と同棲しているらしい」

「へえ、事件を機にカップル成立か。やりますねえ」

ふたりがやり取りしているとき、清水はくるっと踵を返す。

「ああ、ちょっと」

佐川が声をかけるのを待たず、彼は一目散に走り出した。

突然の出来事に刑事たちは思わず顔を見合わせた。

「なんだったんでしょねえ。試験終了目前で裏面の問題に気付いた、みたいな慌てようでしたけど」

佐川から見ても清水の様子は異常だった。まるで恐ろしい思い違いが発覚したようだった。

「なにが清水を驚かせたんでしょう。なにやらこの写真を見つめていましたけど」

登藤がスマホの画面を指す。聞き込み用に拝借した関係者の顔写真だ。

映る人物はくっきりと目を見開いて、口元に笑みをたたえている。けれどその表情に幸せそうな温度はなく、うっすらと疲弊や諦観を含んでいた。そう感じるのは免許証の写真だからだ、と佐川は決めつけていた。免許の更新はたいてい朝早くに行うものである。

だがもし——根拠も論拠もない、ただのあてずっぽうであるが——この人物と金井崇史の死が関係しているとしたらどうだろう。

「そうか」

佐川はすぐさま大通りへ駆け出す。歩道を走行していた自転車とぶつかりそうになってとっさに身を引いた。

「先輩、大丈夫ですか？ 危ないじゃないですか。」

「清水はどこだ」

登藤は顔をしかめ、きよろきよろと首を回した。

清水の姿はどこにもない。すでに走り去ったあとだった。

「彼がどうしたんですか」

「清水はこの人のことを知っていたんだ。だからあんなに驚いて」

佐川は秋山の住所を確認した。真相を知った彼が向かう先はそこしかない。

■清水

「なんで」

清水は住宅街を駆けながらつぶやく。

頭は混乱している一方で、冷静に情報を整理していく。刑事たちから見聞きした情報ははっきりとした事実を示していた。それは清水の仄暗い過去にも根ざす恐ろしい因縁だ。

彼女は知っていて、すべてを隠していたのだ。

清水のことも、金井のことも。

とにかくアパートに戻らなくては。

今すぐ会わなくては。秋山に。

水たまりを踏み荒らして走る。膨らんだ雨粒は清水の肌につかって弾けた。

悪寒が止まず、彼は不安を募らせる。まるで事件の夜に舞い戻ったような鳥肌の立つ感覚だ。足が悲鳴を上げ肺が痛んでも、清水にはもはやどうでもよかった。

車通りはなく、すれ違う人影もない。ぎーっと低い雨音があたりにこだまする。この世界にひとり取り残されたようだ。

あの人もこんな気持ちだったのだろうか。自分を知る人がだれひとり存在しない、究極の孤独を味わったのだろうか。清水は耐えられなかった。希死念慮にうつつを抜かし、現実から目を背けていた。

すべて壊れてしまえ。そんな妄言を本気で口にすることができた。
きつとあなたもそうだったのだろうか。

「だからこそ、だめだ」

秋山の住むアパートが見えてきた。あの場所に彼女はいる。あと二百メートルも走ればたどり着ける。

だが、そこで足がずんと重くなる。

みるみるうちに速度を落とし、清水は膝に手をついた。思い出したように熱い苦しみが彼の体にのしかかってくる。

息ができない。足が上がらない。動けない。

だからどうした。

ごくりとつばを飲んで痛みを黙らせる。

清水はもう一度踏み出した。先ほどまでより歩幅は短い。速度も歩いているのと大差ないだろう。

けれど、止まらない。もう立ち止まらない。

息を切らせながら、着実にアパートへ近づいている。

「はあ、はあ」

ようやくたどり着いた清水は支柱に体を預けた。体力は限界を迎えていた。普段から運動をしない三十代の肉体である。胃袋からコーヒーマグがまろび出てもおかしくなかった。

「ああ」

驚愕と共に声が漏れる。

秋山の部屋の扉が開放されている。

清水はすぐに恐ろしい想像をした。中に入ると足元にナイフが転がっているのだ。そして、真っ赤に染まった秋山が仰向けに寝ている。その瞳は黒く濁り、虚空を通じて清水に訴えかけるのだ。

お前のせいだぞ、と。

「いやだ」

清水は頭を振って想像を掻き散らした。

そんなことがあっていいはずがない。受け入れられるはずがない。

秋山なしに自分が生き続ける理由がどこにあるのか。

清水はもつれながら部屋に駆け込んだ。

「翠華さん」

清水の声にふたつの顔が彼の方を向いた。秋山は窓を背にへたりこんでいる。そしてフードを深くかぶった人物が、秋山の行く手を阻むように立っていた。その手には、鈍く輝く刃物を携えている。

「清水さん、来ちゃだめです」

秋山は手をかざして彼を制した。

「翠華さんから離れる」

清水は構わずフードの人物に近づいていく。相手の間合いに入った途端、ぶんと刃が振り抜かれた。清水はあっけにとられておめおめと後退する。

「ま、待った。落ち着いて話し合しましょう」

「清水さん、いったいどういうことなの。彼女はなぜこんなことを」

秋山はカーテンを頼りに立ち上がる。その際も片時も女から注意は外さなかった。

「事件を担当した刑事さんから話を聞いてわかったんだ。あなたが石田を殺したんだ。そしてタカシさんも――」

女は清水に狙いを移し、おもむろに凶器を振りかざす。

「じゃあ、あなたがすべて仕組んだってことなの、潤子さん」

伊藤潤子がかつと目を見開いた。虚ろな表情からはなにも読み取れなかった。ただ、富士の裾野でのどかにペンションを営む夫人には到底似合わない、鋭く研ぎ澄まされた殺意がそこにあった。

「伊藤潤子、あなたが」

清水は困惑を吐露した。彼女の存在は秋山と佐川から聞き及んでいる。事件当夜に塩がなくなっていたことを証言した人物だ。

「どうしてそこで驚くのよ」

秋山は呼びかけたが、清水の耳には届いていなかった。

「そうか、だからか」

清水はやりきれなくなって肩を落とした。

「ペンションのスタッフが殺された夜、石田は屋根裏の窓から忍びこみました。それは屋根裏が水浸しになっていたことが物語っている。その目的は、被害者の警戒の裏をかくためでした。あなたは被害者が元警察官であることに気付き、窓から石田を招き入れたんだ。

だが、そのためにはいくつか条件がありました。屋根裏の窓を開けておく必要があったし、なにより非常用梯子の存在を知っていなければならぬ。少なくとも真犯人が客では適わない。梯子を伝って窓から侵入するアイデアは、ペンションの勝手を知らずあなたから思いついた。

石田が殺されていたのはあなたの仕業ですね。崇史さんを殺して奪った薬物で儲けていたあなたは、石田の逮捕を機に自分の足が付くことを恐れたんだ」

「待って。お願いだからちよっと待ってよ」

秋山は頭を抱えて叫んだ。

「石田が殺されていた。それより、崇史さんを殺して薬物を奪うだなんて意味不明よ。」

なぜ、そこで崇史さんが出てくるの」
「それは――彼女がアイルだから」

室内の空気が凍っていくのが清水にはわかった。

彼の知る限り、秋山はアイルに顔を合わせたことがないはずである。嬢の中に金井の女がいる、と耳にした程度だろう。それはアイル自身が「店の先輩のところへ挨拶に来ない」と愚痴をこぼしていたから確信を持てる。アイルは店に籍を置いてはいたものの、年齢からか、それとも金井がやめさせたのか、客の相手をすることはなかった。

一方で、彼女が伊藤潤子であることを清水は知らなかった。ペンションにやってきた夜、彼女は厨房でかかりつきりになっていてフロアには姿を見せなかった。清水はオーナーがやり取りする場面を耳にし、漠然とオーナーの妻がいると認識していたのである。

「やりづらくなったわね」

二人の前で初めて伊藤潤子は声を発した。低く沈んだトーンだった。今の彼女なら何人だって殺めかねない。そんな危険な兆候を示していた。

伊藤が秋山を襲う理由はただひとつ。彼女は同じ店に在籍していた。だから自分がアイルだと知る可能性がある。もし伊藤潤子こそ金井崇史の女アイルであると判明すれば、警察はすぐに証拠を見つけ出すだろう。

彼女は不安の芽を摘むためにアパートまで押し入ったのだ。

「翠華さんは関係ない。彼女はあなたがアイルだと知らなかった。あなたの行動は無意味だ」

「あなたが今喋っちゃったから意味ができたわ」

「――外で警察がマークしています。俺が合図したらすぐに彼らが突入する。もう終わりです」

「ふふ」

伊藤潤子は不敵に笑った。彼女はあの時のように清水を見透かしている。

「しみけーは本当にわかりやすい。嘘をつくときは返事が遅いもの」

途端に彼女は凶器を突き出した。

清水はとっさに退いた。切っ先が服を破って肌を掠める。遅れて痛みが腹部に走った。

「ふうう」

心臓が痛いほど高まる。清水はこれ以上の命の危険を感じたことがなかった。

「痛いんだ。あのときは血が出てもお構いなしだったのに。しみけーは変わったね」

「変わったのはあなたの方だ。なにも殺さなくてもよかった」

「それはどっちのこと」

伊藤潤子はきよとんとして訊いた。

「どっちもですよ。なんだか逆に安心しました。俺、やっぱりあなたが苦手だ」

「崇史と一緒にしないでよ。アレは最後まで自分勝手にどうしようもない男だったんだから。あの石田透はね」

透。それが石田の本名か。だから塩貝のダイニングメッセージはスイだったのだ。

「崇史はね、組の内輪揉めで一番目の敵にされたの。彼が排除されるのも時間の問題だった。私はマルボウに保護してもらおうと提案したけど、それは彼のプライドが許さなかった。薬を持って私たちは逃げたわ。あのキャリアケースいっぱい詰まった白銀の粉こそ、私と彼が夜を支配した証だったもの。」

けど逃亡は長く続かなかった。崇史は顔を知られていたから、ほかの組も血眼になって追ってきた。だから崇史は、薬を私に託して首をくくったのよ。泉に沈めたのは墓標になる目印が欲しかったから。」

平家物語みたいなものよ。再び夜を支配することを願って、崇史は薬を残したのよ。」

私はそれを継がなきゃいけなかった。そういう運命ね」

「あの、潤子さん」

秋山は戦々恐々と質問を試みる。

「今はペンションのオーナーと結婚しているんでしょう。だったら崇史さんのことを忘れて、別人として生きればいいじゃない」

「それができたら」

伊藤は怒気を爆発させた。刃物を振り上げ、秋山にとびかかろうとする。

「私はアイル、金井アイルなの。私の時間はあのときから止まったままなのよ」

「やめろ」

清水の叫びは銃声がかき消した。嘩然として振り返ると、佐川と刑事がもうひとり、銃を手にして立っていた。

「動くな。凶器を置いて跪け」

「今のは威嚇射撃だ。先輩が外したわけじゃないぞ」

伊藤は茫然と静止した。彼女の肩から力が抜ける。刃物が指からすると落下した。

まさか清水のハツタリが本当だとは。もはやこれまでだ。

読心術を持たない清水であつてもそう読み取れた。

「伊藤、そのまま動くな。ふたりとも早く部屋から出てください」

佐川は銃を構え、冷静に指示を出す。

「翠華さん、さあ行きましょう」

「ええ」

清水は秋山の手を引き、急いで部屋から飛び出した。

警官たちの背後まで逃げてやっと安堵した。思わず秋山を抱き寄せる。

「し、清水さん」

「よかった。無事で」

秋山の細い肩は、力をこめたら壊れてしまいそうなほど繊細だった。それでも抱きしめずにはいられない。この気高く脆い存在を二度と離すものかと一心に念じた。

雨は絶えず降り続ける。額を伝う涙は雨粒に混ざり、消えていった。

「先輩、僕が見ているのでその間に手錠を」

「任された」

刑事たちは警戒しつつ伊藤に近づいていく。

「しみけー、最後に聞かせて」

伊藤はやおらに清水へ向き直った。

逮捕される決心がついたのだ、と清水は思った。

「なんですか」

「どうして、してくれなかったの」

清水はすぐに質問の意図を理解した。

アイルを送り届けた夜、彼女は清水を蠱惑した。下半身に手が伸びる瞬間、清水は彼女を引きはがし、拒絶した。二十歳も離れた女性に無理やり迫られたことは、清水にとって恐怖そのものだった。

「あなたからは俺と同じ匂いがしたから」

伊藤は黙ってその先を促した。

「あなたが嫌いだったからじゃありません。あなたを通して見える孤独な俺が目障りで仕方ありませんでした」

秋山が心配そうな視線を送る。彼女は清水と伊藤の間に何があったのかを知らない。

伊藤の名誉のために彼が語ることもないだろう。

「そのままだ。動くなよ」

佐川が手錠を片手に伊藤の手首をつかむ。彼女が抵抗しないためか、その動作は努めて丁寧であった。

「刑事さん。竹さんには感謝を伝えておいて。私が経歴を偽っていたことに気付いてなお結婚してくれたもの」

「わかった。そうしよう」

アパートの前に車が停車する。警察の応援が駆け付けたのかと思われたが、そうではない。田園をのんびり走行するような白い軽トラックが横付けされていた。

ウインドウが下がり、白髪交じりの頭がこちらを向いた。

「あれは」

清水にはその男性に見覚えがあった。秋山もそうだったようでも思わず顔を見合わせた。

「潤子、来い」

男は炸裂したように伊藤の名を呼んだ。清水はその声で彼がだれかを理解した。

ペンションふおへのオーナー、伊藤竹ではないか。

なぜこんなところに。いや、疑問より先に彼の行動に思考が奪われた。

「潤子、ここだ。来い」

清水は伊藤潤子に目をやった。彼女も驚愕し、夫の意図を察したようだった。手にはまだ手錠がかけられていない。

「竹さん」

伊藤潤子は佐川を体当たりで転倒させる。佐川も逃がすまいと手を伸ばしたが、寸でのところで届かない。

「待て、撃つぞ。本当に撃つぞ」

もうひとりの刑事が銃口を彼女に突きつけた。その手は震えている。到底命中できそうな心理状態ではなさそうだった。

伊藤潤子は刑事の射線を素通りして部屋から転げ出る。

清水と秋山はあつけにとられ、ふたりが車で走り去る様子をただ眺めていた。

「ま、待て。おい、登藤は応援を――」

佐川の呼びかけに返答はない。登藤という刑事は引き金に指をかけたまま悄然と立ち尽くしていた。

「すみません。俺、撃てなかった」

「下を向くな。時間は待ってくれない」

清水は車の走り去った方角の空をしばらく眺めていた。

伊藤潤子はずっと金井アイルとして生きていたのだ。それは清水が崇史の下で働く苦痛に等しいものだったろう。

清水には彼女がもうひとりの自分のように思えてならない。

そして、伊藤竹は自分にとっての秋山なのだろうとも。

あの夫妻は、きっと自分と同じ結論に至ったのだろう。

幸か不幸か。生か死か。天国か地獄か。それはたどり着いてみないとわからない。

彼と彼女の行方は干天の雨だけが知っている。

(本文…72061字)